

八年中行事

1 正月

。正月

。正月は「うが」或は「お正月」よんがつともいふ。お正月は元々旧正が多かつたけれどもだん／＼新正に改

められてきた。

。門松 門松には先づ枝の三重又は五重に出た形のよいものを選び、その根側に黒松を白松に赤松を用ひる。そしてその松に梅と竹を添へて、

てその根本に白砂又は赤砂を盛るのが普通である。然し極めて丁年にはす

る家では砂盛りや周囲を竹又は炭で圍む事もあるが、此年此真箇茶化され

る家になつて来た。尚簡單なものとて、根引松のつぎに梅や竹等を添へ

る。それを白紙で巻いて、水引をかけたものと、門口の柱に釘で打つたりする。

。又注連縄 注連縄の両方につけることもあふ。柱に釘で打つたりする。

。注連縄 注連縄の式として、輪状細長い縄状のもの、又文くて短い田鏡状

のもの、等々あり、そのうち、神棚や燈籠、窓井戸、縁屋倉庫、豆所、自轉車、道標等には

その用途最も、神棚や燈籠、窓井戸、縁屋倉庫、豆所、自轉車、道標等には

用ひられ、他の二種は輪状のものに比して用途が狭く、主として神前、内

口、等重宝、所、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

。口等重宝 口等重宝は、神棚に用ひられる。

には中央部に燈やサかん等を上げることが多い。前注連縄はじんじんに

砂意

一部の家には砂道をつく。即ち門口に赤土又は白粉を撒き散らす

す。

これは宗教関係の目取りについで色々その縁起を考へ千の目には梅の

お餅餅

餅焼きの目取りについで色々その縁起を考へ千の目には梅の

ないことになつてゐる。

正月の餅は昔は必ず栗餅だつたさうだが、現在は糯米餅が普通である。然し

今でも神祇に供へる爲にとわぐ／＼栗餅を搗く家もある。お供へ餅には

なりが、穀餅が多く、どやもち、いぶきもち、栗と呼ばれて、相當長く行はれてゐ

る。次に鏡餅の大きさを思ふと三升を以て一組するものから三合

を以て一組するものに至るまで種々ある。そしてその一組は多くは二

重であるが三重、五重に供へるものとして三重にすゝ家が、多い。又普通の

大ききもある。鏡餅を供へる範圍も廣く、大体注連縄を張る場所には大て

い供へる。還敷炊事場、書斎、仕事場、浴室、御座倉庫、便所、机、箒、巾、是迄

供へ方は簡單な場合は小さな鏡餅の一重、一組のもの、供へたり、或はそれ

が、人々のせて供へる位である。供へる台は大鉢、五宝、多く紙と二枚敷いて、白

白、菱餅、昇餅へる家もある。供へる台は大鉢、五宝、多く紙と二枚敷いて、白

を上げ、つが普通である。

稻上げ 元日の元旦の事を、おねあげと云ふ。稻上げに、送りこめて、豊作を

祈る。このおねあげは早くするのが普通で、除夜の鐘と共に起るなりする。

前元日の朝、一ふの主人と後継者とが先ず第一に起き、若水を吸ひ、雑煮の仕

度、すすむ。おねあげの起る家もある。第一に起き、若水を吸ひ、雑煮の仕

若水 稲に水をすくると、先づ若水を吸ひ、不天暗いので、懐中電燈や提灯を

ともしで吸む。若水は近頃バケツに吸むのが多いが丁寧にはす桶に
吸むのである。そしてその手桶には注連縄ツルナをかかん等を以て飾るのである。

さて井戸にお祭りして若水を汲み洗面後雑煮を炊くのである。
歳徳神トシトクノカミ元旦の朝早く歳徳神トシトクノカミと稱して歳徳神を祀るために鏡餅を供へて置く。さて

洗面の時その方向に向き又歳徳神トシトクノカミと人に家運の繁昌一年の幸福を長ちん
ことを祈る。又所にあつては歌も残つてゐる。

屑蘇クセソ元日の朝雑煮を祝ふ前に一般に酒を祝ふ。然も屑蘇を用ひることは
は割合に少く、大抵は清酒である。祝に用ひる酒は何れにせよ普通は神棚

に併へたり。あるは銚子チウシ盃等も特殊のものを用ひる事は稀でいたゞく
前には四方へ神に正拜していたゞく。その順序は普通年長者からで最後

には司事ツカサトとつて、主人が兩社のサ一同お辞儀をして雑煮を祝ふ。
氏神ウヂノカミ除夜の鐘によつて参拜する人もあるし又雑煮を祝つてから参拜

する人もある。文休に男の人が多く洗米煮飯として小飯を捧つて行つて
あける。又お餅をあげる人もある。

雑煮正月の雑煮は男孫に主人又は長男が炊くことになつてゐる。焚き
つける火は慈恵寺は大神社社の暖道祭の火で炊き又氏神様よりいたゞい

た火で炊く所もある。又マツヤの火で炊くものもあるけれども焚付けは殆
んど豆鼓と走つてゐる。

調味料として味噌を用ひる。若しは昆布が多く雑煮用の餅は特に扁平
な中央を凹ませたものが一般に用ひられこの餅はその作り方が餅

えんは餅等と呼ぶ。これを焼いて入れるものが普通で其餘に煮るものは昔

通大根人墓芋牛蒡豆筍昆布等を入れ、そして普通大根は輪切りにして丸形のものを入芋は小さいものを薄く切つて丸くする。用びる。膳には親袋に新しい箸を入、その箸は杉箸で、両端を細くした両口箸と稱へる。膳が多い。然し食膳を賑すのは五種煮である。

。五種煮 煮豆は多く黒豆で醤油砂糖で味付けして甘辛く煮つめるのが普通である。

。午膳は五種煮に切りて茹か、胡麻醤油の中につけたりハリハリと福一で茹でたものを醤油につけ更には酢につけてはらしたものである。

。敷の子は水に長く浸して置いたものを醤油で一寸もんで醤油を掛けて食べる。

。田作はひなごとも呼び焼いて醤油につける。

。鱈は棒鱈で長く水に浸して置いたものを砂糖と醤油を付けて食ふ。

。其他冷豆腐等家々によりてつけものか異つてゐる。

。祝直し 元日の朝食は特に早いので、祝直しと稱して朝の雑煮を代りて食べふ。

。早夕飯 従つて順に早くなり四時前後より夕食をして白飯で副食物は自由になく食べる。

。福粥し 一日の朝はあまり早く起きない。そして多くは一日と兩解雑煮を祝子が小豆粥の家も相當多い。この小豆粥を福粥と呼ぶ。そしてこれに粥を入、副食物として矢張り元日と同様のものである。

。仕事始の さて二日は仕事始めと呼びて仕事にかゝる家もあり、尚神休といつて六一た事もせず一日中遊び暮すこともある。

○天竺 二日の行事の二に書初めがある。書初めは又書く文句にありて天竺とも稱せられる。一般には縁起のよい各自の好む文句を書く。そして之を十四日の大とんどに焼くのである。不淨 三日は不淨の日と稱して、仕事は無事の事廻禮もせず外出を控へて寝たり遊んだりする。此三日にお供への饅頭その他をさげる家もある。

2 七草

○七草摘 薺のことと七草と呼んで春の七草の代表として七草摘みといへば薺摘みのことになつてゐる。さて薺摘みは六日にも行ふが普通は五日とされてゐる。六日は禁中の七草摘の日で、一般民衆の摘草をすべき日でないとしてされてゐる。

○七草刻 七草刻は六日の晩行はれなすべく大きな音をたてるのがよい。玄ふのてゝ組板の上に両手で鉈丁を拵つて歌に合せて刻む。

○七草粥 味噌の雑炊で七草七種類を入れる家は殆んどなく薺又は菜で代表させて入れる。又これにも餅を入れたる。さて出来ると先づ普通は粥にはお供へするが、前記井戸倉道の正算に焼ける。これと食べて夜ふのは一般には悪疫豫防のためおとされゝゐるが、これを炊く時には一般に豆穀を火をつけるのが多い。

3 とんど

○とんど 門松・注連縄は他の諸用品と共に一所に集めて焼く。之を大とんどと呼んでゐる。焼くのは十四日の夜である。或は併に十四日の大とんど

どと云つてゐる。

。あんどうつくり どんどはとんと場と稱して毎年定つた場所とする。大抵は村はがれの人家のない危険の少ない處である。大体に川原が多く、あんどうつくりのほ主として子供が最も多い。あんどは木や竹で骨組をつくつて藁や注連縄等を入れたつづ。

。奠火 夕刻村の年長者が歳徳所の万がう火をつける。

。天竺上 どんどの行事を志願することの出発点のは普き初めを燃すことである。

。口焼き 餅を火の中へ入れて焼くこと。口焼きになり出世する云々云々。この口焼きの餅は

正月の餅でこれを食すると益氣をなすといはれる。この口焼きの餅は

。あんどが燃え終る頃その火を灯し、又は鹽煙に移したり消えないうちに家に持つて歸り神様に上げ、又拜礼する。又その火で世人さい雑煮豆腐等のおさいを炊き、その灰は田に置く。

4 二の正月

二の正月は二月一日で、節軍ではみそが何所でも一日楽しく祝ふ。雑煮を祝つたり氏神詣をしりして休む家もある。

5 湯の入り

身体がこぼらないやうにと湯を熱くして食ふ。これより僧侶の修行のはじまる。

6 節分

。鰯と終 節分は一般に年越と呼はれ魔除けのために鰯の頭と終の小枝を
門口にさす。鰯は一尾終の串の先にさす

。氏神詣 節分の豆を食べることを年王と云ふ。この豆は本當に年王と
るものであるがその豆は神社のものに食へるものが多い。

夕方の氏神様に参り家から豆を持ちて行く。その豆には別にきまりが
なく紙につく人を持てゆへ神社では神前にお供へてよい年をたば
らしてめでたくと神社から豆をたばらしてある。この豆で年をとるが家の
豆もめでたくと豆撒きをするのである。豆は年齢の數だけと一つ多く食べる
所もある。

。年越 鰯と参 年越鰯はきもので鰯に参はるは年王の参をいふ。参をして是つて
つる。入所にしりておとに鰯の他に油揚げや豆干等をたべる。

。豆撒き 氏神食後所へお供へて男即一家の主人が湯へお供へてお供へる。電
気も来し太切な部屋に一面して撒くが其他の部屋や庭州にも撒く家も
ある。前立は残さず終つて参留の時に食べる。

7 初年

。稲荷神社のお祭り 各大家の稲荷神社に参拝し各家に於てもお供へる。度々
お稲荷さんをお参りしてお供へる。小豆の飯で油揚げは稲荷ずしを待へ
る。又奥もお供へし或はあめ玉も餅へ近所の子供に与へることになつて
ある。

8 彼岸

大体二月十八日頃より一週間彼岸が續きその間に彼岸の節句を飾りする。即ち各家では所壇を清掃し祖元の霊を慰める。又お茶の湯を煮て参りさぐると申馳走を供へする。特に真中にあたる日を春(初)と云ふ。又彼岸の中日は人と呼び盛六にお祭りをしつて所によつては彼岸参りありて長弁井へ参り彼岸酒をとりたゞ念佛をあげる。

9 節句
桃の節句

現今はまだ旧暦多く三月三日に童の節句桃の節句女の節句等と呼んで雛祭りをする。雛人形は普通二月十五日之前節句と云つてその頃から飾りて飾る。雛壇に供へるものとしてはお餅と白酒桃花が多く其他飾り菓子飯切等と添へるものが普通であくが美餅は蓬と白を一枚宛重ね合してつくるのである。白酒は徳利に入れて供へる。飯も炊き子供は晝過ぎ山登りをして遊ぶ。のち羽衣をいれた。

萬葉節句

旧五月一日に行はれる。三月の女の節句に對してこれに男の節句で男子のある家では鯉のぼりをたて武者人形等を添ふる。幟は木で先に矢車又は萩の葉等をにつける。床飾りとして階段状に最も上段には武者人形又は甲冑を置きその眉目又け下段に他物を飾る。そして全体は昔の歌事の一節に於ての如くして軒に菖蒲と蓬をさす。又柳柳武者人形にも供へる。

尚糰又粕餅もつくる。糰をつくるには茅を用いる。中の餅は大体長卵形で長さ十粒乃至一五粒位である。又軒にさした蒿葉をとって餅巻をする。これは頭痛をおこさないためだといふ。尚これでは蒿葉風呂に入り疫病にかからないまじないとする。他にダンゴ餅や赤飯をつくり種々即ち食するものである。

10 連座

春休みといふ。大字にあつて異り、慈恩寺。脇本は四月九日の大神神社の例祭と同じで、他の大字は八十八夜である。これは長谷の牡丹の開花期で、気候もよく親戚知己等相集ひ餅をつきして種々の即ち食すをなし、和樂の日を送る。

11 梅雨の八

梅雨申疫病に罹らぬためと云つて梅干を食ふ。

12 夏祭り

慈恩寺では八阪神社の祇園祭りを行ふ。當日は野苺、真尋の即ち馳走で各家では熾灯をあげ夜は花火をあげて賑ふのである。

13 土用の入

脇の腐らなり様にと、脇餅を食べる。又土用に入つた丑の日には川奥を食べることになつてゐる。

14 七夕祭

。七夕 一月一日、二日、三日、五月、五日に次いで七月七日に七夕がある。七月

。七月は旧暦で新暦なら八月七日である。竹と短冊 この日には竹に五色の紙の短冊をつけたものを家の裏の廣場

様先き等に立て、星祭りをする。大抵は六日の朝立て、竹は新しく出た真

竹を使ふ。紙は赤、青、緑、黄等の色紙を短冊型に切つたものが普通で、その大きさは普通

一枚を四五枚に切つた程度のものである。文字をそこに書き、文字は一定

してゐないが、天の川、七夕祭、織姫様、家族の名、學校で習つた漢字、詩歌、俳句等

を書く。又それに網、形や種々の形を切つたもの、又折紙、酸漿等をつける。そ

してこれをつけるには主として、標榜葉をつける。瓜、胡瓜、南瓜、茄子、玉蜀黍、葡萄、酸漿、苺、も

。餅へ物、種、餅、物として、は、蔬菜類で、西瓜、胡瓜、南瓜、茄子、玉蜀黍、葡萄、酸漿、苺、も

。梨等、種、餅、園子、束しを餅へ、その下で、家内一同、夕飯をいたゞく所もある。竹

。七夕流し、かくて星祭りが終ると、竹や、供物や、短冊を川へ流す。残りの竹

は、盆の花押に用ゐる。

15 盂蘭盆 盂蘭盆は新暦では八月十三日から十五日まで、旧暦の所では七月

。盂蘭盆 盂蘭盆は新暦では八月十三日から十五日まで、旧暦の所では七月

十三日から十五日までの間に、行ふ。近頃新暦をとるものが多く、なつた

。七日盆 精霊祭は七日盆から始まる。墓肥の清掃は五日前後より、當日の

朝までに行はれ、線香、榊、秋の七草、果實、野菜類を供へる所が多い。その時は

墓前に念仏をあげて、供養し、佛壇には、さげ飯、赤飯、素麺等を供へる。

墓前に念仏をあげて、供養し、佛壇には、さげ飯、赤飯、素麺等を供へる。

墓前に念仏をあげて、供養し、佛壇には、さげ飯、赤飯、素麺等を供へる。

墓前に念仏をあげて、供養し、佛壇には、さげ飯、赤飯、素麺等を供へる。

精霊棚 精霊棚には祖先の霊を祀る普通の精霊棚新佛を祀る棚と大御
を祀る無縁佛棚の三種類あるにも精霊棚と新棚の二種とつくるのが大御

合である。

精霊棚は佛壇の前或は横に机空箱戸等を利用して、白を塗りその上に葉
座を敷き更に蓮葉を敷いてその上に佛物をして祀る。

新棚は普通には檜板を敷きその他外部からよく見える所につくると、その
板は骨組は竹でつくり板の葉をつけは上げる。佛は麻藪でつくる。

餅物として果物や野菜類及び葉巻等がある。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

迎火 迎火は精霊棚の準備が整った時に迎火を焚いて精霊を迎へる。

洗ひ米を餅へるの普通とし、花として萩と菜をたてる。夕食は芋のお
さいはお結び等、家内一同月を賞しながら食べるのである。又川で目や
足をはねへばよいといはれる。岸下げた芋で芋汁を炊き、男だけ食べる家も
ありとろろ、夜なべも始まる。

。栗の名月、月九日を栗飯を炊き、栗を十二個をお供へする。
旧暦十月

。夏、虎の十月十五日で畔豆を供へて一家団樂する。

秋祭り

秋祭りの日は各大字によつて異なり、須賀坂は十月二十一日、下三太字は二十
四日、龍谷は各月の二十七日、笠原安田は十一月二十日となつてゐる。

。宵宮、お祭りの前日に祭の準備に多忙を極める。各戸に提灯を出し、祭の
の色々な御馳走の準備お餅をついたり、甘酒をつくったりして忙しむ。

當日は晝夕食は魚や芋、蒟蒻、大根の御馳走を食べ、夕方からきれいな着物を
着て、家内そろつて宵宮参りをする。

大字によつては色々の催しをする所もある。慈恵寺では太鼓台で賑ひ、竜
岩には子供相撲、又黒崎の宮座行事もあり、一日中遊ぶのである。この日頭

家の人は色々とお宮様の御祭事の古詣をなす。

。祭、一日遊びで親戚や知己がより合ひ、種々の御馳走を樂しく語り、宮参り
等となりて一日楽しく暮すのである。

。御宴、しなほしと云つてお祭りの御馳走を食べて遊ぶ家もある。

18 大晦日

お正月の前日でその準備に多忙を極め仕事が遅かつたならば一年中の仕事
事の遅れると云はれてゐる。仕事として一年中の塵を掃ふと云ふて大
掃除をなしそれが済むと神棚に色々のお供物をする。又注連縄を張り門
松の準備雑煮組重等の即馳走も準備し置き用意萬端整へてお正月を迎へ
るのである。
又一年周の即禮参りに氏神様へ参る人も多く夕方からは「そば」と云つ
て食へる。特にそばは出立そばと云つて此はれる。

19 其他

。藤りと風日待
。藤りは夏寂みでめ様氏神様へ参り即馳走をいたぐ。
風日待は神社に二百十日或は二十日には大湯無き様祈願し即馳走する。

。農家の休み

。早苗おり

。やすみ

。鎌をさめ

。亥の子

。は農具にも

。るで固く

。半夏至

。講

各村に伊勢地藏庚申講等ありてその收入によりて一二度行事をする。

連座秋祭りの他に農家には休みがある。
田植終る頃一日休業し苦を忘れる。
麦を収穫した後休む。
稲刈りの終る頃休む。
秋の終りを祝つてお餅を搗き又色々即馳走をし、神様に或
は供へて感謝の意を表す。所によつては子供が新藁を藤のつ
るで固く結び村中を叩き廻り又各家の回り歩く。
。半夏至 だんごを食へる。

一九 風俗習慣

本村の生業は大半農業であるから、風俗や習慣に關する事も農に關する
ことが甚だ多い。

1. 婚姻

普通媒介人が来て良縁ありて話を持ち込み、続いて双方より開合せをな
し交渉が進んで見合ひをなし、吉日を決定、結納としては、進上樽する
め、昆布、紅、白粉、紙包等に目錄を添へて求婚者より送る。然る時は
入婚者は納書を渡す。然し近頃は衣服料及び酒肴料目錄のみを送り、現
品の贈答をなさぬ家が多い。

。儀式

嫁婚家にては近親を招き荷物は當日持参する。求婚家にては當日儀式を
挙げる。入婚は普通自動車を用ふ。婚儀の式には三々九度の盃をなす。
奇習として嫁に行く時は再び帰らぬ様にと藁を燃す。

。二三帰り

婚礼の式ありて後二三日して式は翌日に里に帰る。この時婿入りを行ふ。
。数入り

。金正月に嫁は里に帰る。婿の方より金には精正月には餅を贈るのを例とし
れてゐるが、現在魚の入手困難のため金銭にて代りてゐる。
。粽

粽は五月嫁の里より贈る。昔は粽でされたものが風呂敷に代用され現在では配止されてゐる大字が多い。

2. 出産

・腹見舞(帯祝)

新嫁娘は五ヶ月に達すれば、親元より紅白木綿に見舞品として赤飯を贈り、受けた家では之を親戚及び近隣に配布する習があつたが、新体制となり配止されてゐる大字もある。この日産婆を招き妊婦の腹帯をかけ、産児に湯浴をさせる。嫁の里より餅を贈る。餅には男は大、女は小といふ風がある。

・六日割

産婆をして産児の髪を剃らせう。この時割つた髪は田辻に埋む。名附け

一七夜と稱して七日目に行ふ。この時帯祝を受けた家より祝品を持参する。又祝品を受けた近所として里方より贈られ、祝餅を返すのを例としてゐるが、新体制以来配止されてゐる大字もある。

・参詣

生後大体十一日目に氏神に参詣する。この時産児には嫁の里より贈られ、産衣を着せ、産婆に抱かれ、氏神に参詣し、他家の子供に菓子と與ふ。見に来た人は廻付として、金銭包を長い水引につけ産衣の紐に付ける。大字によつては當日近所の子供の仲間入りとして赤飯と炊き焼物を供へて馳走され、近所配止された様である。

。食初め
百々日目に於て焼物付にて母子の食膳を作り、産児の食初めを行ふ。石
を産児の食膳に供へる風あり。

。誕生の祝

第一回の誕生日に晴衣を着せて宮詣りとなす。誕生祝として餅をついて
親戚や近隣に配る風習ありしも、現在では内祝に止る。

。嫁の里より贈るもの

綿入、春裾、金單衣、五月の節句には鯉幟、女兒には三月節句に雛人形

正月には男児には弓矢、女兒には羽子板、三才の紐落しと言つて、幣の
祝として贈る。

3. 厄年

男子は二十五、四十、女子は十九、三十三、三十七を厄年といひ、中
にも男子の四十二、女子の三十七を大厄とする。前年と前厄、翌年と後
厄といひ、前後三年を忌む。尚三十四(産厄)、四十二(死厄)、四十九(死厄)
を厭ふ風がある。男二十五、女十九は岡寺に参り、男四十二、女三十七
は松尾寺に詣り厄除けを行ふ。

。男四十二の厄除け(初老)

親戚の者を招待して御鏡餅を作り、氏神様にお供へして祈禱を行つても
らふ。その日は赤飯を食して御鏡餅を親戚近隣に配る風があつ
たが、現在では文を配止されたり、又は金錢を以て氏神様に献納する様
改められた所もある。

4. 還曆祝

・六十一歳の祝（還曆祝）

とんぼ返りとも言ふ。子供に生れ代るといつて、子が親を祝ひ、父には赤はつち、母には赤の腰巻を送る風もあるが、大体は何かの衣裳を子供達から贈る。披露として昔は見事なお鏡餅を親戚、近隣知己に贈られてゐたが、現在では内祝に止められてゐる。

・七十歳の祝（古稀の祝）

俗に七十賀と稱し餅と揚いて配られてゐたが、現在では内祝に止る。

・八十八歳の祝（米壽の祝）

八十八歳のますかきともいふ。杓子に八十八と書き餅を配る風があつた。又男女共に半紙に半形を取り一男一女を志之と杓子に添へて贈り、受けた家は之を出入口の鴨居に打ちつける風がある。

5. 葬儀

普通佛式神道にて行はれ、大寺によつては墓地に至る葬式道がある。佛式に於ては死に當夜、夜伽又はお通夜と稱して讀經に夜を明かし、棺式は死人も湯灌し頭髮を剃り白衣を着て旅装束せしめ入棺す。巨額の嗜好品を飾む。葬式は親類知己近隣が打寄り、隣組長の指揮により行はれる。僧侶讀經の後に棺燈籠を蓋被せ、石罌花籠等を持ち道中行列を、墓地に至り棺を安置して焼香となし、引導と控けて後理する。

法事

死後七日間を中陰と稱し、七日毎に法事を営む。三十五日、四十九日（中陰を經れば百々日）、一年忌、三回忌、七回忌、十回忌、葬後忌を招き祝

○威近隣の者を招き讀經回向し又は配り物を以て之に代ふることあり。回

○6 其の他の習慣

○入營除隊

○己民一同氏神様に参拜、各種団体代表祝辭を述べ己民一同無言の祈禱ありて入營者答辭を述べ万歳三唱あり一同見送りをする。除隊の場合も同様にして感謝の意を述べる。

○雨乞ひ

○連日連夜の晴天、爲農作物が被害を受けるとき村民相寄り氏神様に乞ふなり祈禱をなし後、大字にて最も高い峯に登りて燐火をなすか或は鐘太鼓を打ち、いて夜大字の領分の田の畔を提灯或は松明をつけて大聲にて雨乞ふもれたんもれと歌ひつゝ廻り風習がある。

○雨喜び

○願がかなない農作物に慈雨の降り来る時、蘇生した農作物を喜び感謝の休みをなす。又雨喜びと云ふ氏神様への祈願の種類によりて氏神様の境内にて神樂をあげ又こもりと云つて村民各々御馳走を作りて氏神様の境内に集り之を供へて後一同食する風あり。

○垢離取り

○氏神様に一病氣平癒、武運長久祈願、氏神様に参拜して後鳥居より并殿迄神又南天の葉に水を付けて三十三回往復し後神主と共に祈禱をする。

○榊上げ

○大工 石工 左官 其の他親戚知己等傳人を招き 酒肴を饗して披露する

その初めに棟梁施主等に祝盃の取渡を行い色々な祝歌を歌ひてお祝ひす
る。招待された者は半紙に祝儀を添へて贈る。

二の 朝倉村と文藝

1. 俚謡

現代老人の歌はこれ、あつもの

高い山

高い山から谷底見れば、瓜や茄子の花盛りよ、アレのドンドンドンフ

のドンドンドン

琴平船々、追手は帆かけて、シランシラン、廻れば四國讃州中の郡トッサン

金平大權現、一のまわりて

權平が種蒔く島がほじくち、三度は一度は追はずばならまいズンベラ

ズンベラ、向の小山の小松の木蔭に十六島田が出来て、小招く何かい

こておき行かすばならまいズンベラ

磯節

ふで赤いのはつゝじに椿、咲いてからまゐる藤の花、咲いてから

らまゐる、クレドッコイ、藤の花、咲いてから、咲いてから、咲いてから

とどく、青菜の性なら、蒔いて来い、園子の性なら、蒔いて来い、蒔いて来い

なら、蒔いて来い、お客の性なら、毎晩来い、又しく過はねば父さん、お主人

お母さん、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人

お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人

お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人

お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人、お主人

戀しくばまた尋ねてござれ書はしのだの森にすむ
能くや止めんしやれ歌ならぬしやれ能くしや仕事の新魔になる

草取歌

四段五段の帆を巻きあげて何處の港につくやう、今年には豊年穂に穂
が咲いて道の小葉も米かなも、腰が痛い、平抱をしやれ草取りせぬばよい
稲出来ぬ

恋歌

こゝの裏屋にめうがとふきとヨイソラめうが目出度いふき敏示昌面自マ
にヨノーにヨーダンヨイソラ

童謡

正月末をら何うかし雪のやうななまなべて、其處のやうなぬも食べて割木
のやうなと、そへて煩悩へあなつておん水にこれよ
お月さんなんぼ十三七のまを草花いなこんど京へ登つて、身のせぜであま
い買つて進ませよう

馬馬小馬あしこの市に豆買つて食はそ、豆を煮やん水、塩なとぬぶつとり、
高野の弘法大師この子だいて粉挽いてこの子の目に粉はいつてもうこの
後はこの子をだいて粉挽こまいの高野の弘法大師

螢狩に申ふ文句

木も螢も来いあつちの水は苦いぞこゝちの水は甘いぞ、水のきてゆききて
とんで来い

子母唄

うちのこの子はがしこでござる唯もあほやと言ふてんれな言ふてんれな、
うちの赤ぢやんがしこでござる何時もぬんぬをしてくれ

ねんねしやんせねと子はかはい起きてなく子にうらにくい
うちのちちやんのわいふちやんいづれはまらねんねす
ねんねなされね今日日は二十五日明日は坊やの誕生日誕生日は小豆
の飯をいいて一生この子のまなむに
この子なきやわとつめわがとおもて親がながめわぬがし
西も東もながめておくね何でつめりもしよあ人の子をねんねこりよあ
去年のやいと今年のやいとくらべて見ればや、どうしバ——もう一つおまけに
マイマイレタ

三月の餅場さの時鳥ヒやの時の歌

からす来いからす来い餅やねナニの餅はおまへさんは一つわをしに二つ
さくら三つとがいにしよ雷でとつたら皆やわわ——

嫁さん歌

あの嫁はんはふいけねと帯の結のようが道樂た内いんでむこはんはひか
らね不審な目がいやわいで後々笑ひおまん三つで後々やんだ

指を用ふる遊戯

この子はこの子と喧嘩してちんこべががわて親いさんがおこつて神天さ
んの後指で中着んだと上着んだ

お母さんねんとりもち賣つてんげん今ねつておとこや

草履をほり上げて遊ぶ

雨か天気か雪か相が

おつち歌

一ぬ二ぬ三ぬがし西ぬご五ぬの六ぬし七ぬの八ぬし九つすでもうた
。来う草履ほりておまけを作りならす時に用ふ

ハルごんはながな昆がまを泣いてる餅くはそ

フタの光を捕へてする遊戯

水綿織北織北一反織つてら休ましたわ口

亥子の歌

亥子の魂に餅つかぬうちめとちやのどづくこの嫁さんおきててり

ねてて新米煮栗で祝ふ北

雪降りの時の歌

雪雪の歌

菜の花に止る菜の花があらば止る北

色々の歌

お月八日花より團子

あとの鳥先々やらな弓や鐵砲で打殺す

郵便さん早く走らんけもうかれこれ十時や

大おんぢやお入り頭が大きい入りれ心裏から廻ってお入り

御飯粒をこぼすと目がつぶれる

人に唾をかけると死んでから鬼に舌を抜かれぬ

針を糸末にすると死んでから針の山へ登らされぬ

大豆の皮をむくと死んでから鬼に夜の皮をむかれぬ

敷居の上のぼくとお父さんの頭に登ると同じである

人眞似をするとは穢になる

夜象の中をはよとげんが悪い

○墓でこけたら墓猫になる。
○夜を言ふと息に命を根の呪い。
○著ではさみ合ふと仲が悪くなる。
○おいへの上で下駄をはくとげんが悪い。
○夜口笛を吹くとげんが悪い。
○杓で水を飲むと杓の子が出来る。
○元旦は夜と一年中泣いてばかり。
○かまどで歌をうたうと気遣になる。
○火鉢の火を二人で吹くと仲が悪くなる。
○二人で塵を取ると仲が悪い。
○うしろ泣をするのと親に早く別れる。
○人に影をうると自分も早く死ぬ。
○かまどの上に虎丁をのせると罰があたる。
○御飯を食べて仲をすくと腹の下へ御飯がはいり。
○人の周りをまわると蛇になる。
○夜便所へ行くくせがいついたら明日の晩は用事があるからどうもせんといえ。
○御飯の上へ箸を立てるとげんが悪い。
○頭をたくと馬鹿になる。
○寝て御飯を食べると牛になる。
○子供がマツチをすくとよぼれをこく。
○夜笛を吹くとくつなが来る。
○耳塞を火鉢にくべると人ほになる。

鍋のふたの上で豆腐を煮るとそぐちの子が出来る。

火が火にはまるとおこになる。

へっついさんちり紙もやすと気遣いになる。

足袋をはいておると親に早く別れる。

夜は、ぐさをふくと煙が来る。

お茶の上へものをおくと腐る。

物差をすから手へおるとげんが悪い。

湯を沸かすとお湯をこけて焚くとげんが悪い。

人の出るあとですぐ障子を締めるるとげんが悪い。

風呂を早くおるとお湯をこけて焚くとげんが悪い。

箸を失ふと金匱になる。

茶碗の音が屋根の棟に聞えたら七代金匱をする。

天祥橋をまたげるとお湯をこけて焚くとげんが悪い。

昆布を焼くと七代金匱をする。

豆腐を煮るとお湯をこけて焚くとげんが悪い。

文殊さんの水で字をかくと上手になる。

伊勢のおはらいさんをお湯をこけて焚くと百足にさされる。

毛を川にすてると気遣いになる。

3. 方言と言語指導

國語教育の根柢ともなるべき言語教育のつとめ一考を要することお標準

語及方言の問題であるわけでも困難中の困難視され、おわものは方言

にこいには又一種の実験性のあることを見逃してはならぬと考へる識者

は區々にして盡くさうにもないが標準語あつて方言の價値を全く認

標準語と方言

す没却するもの又は郷土教育教育地方化の問題にハ醉するの餘り標準語を輕視し全くの方言を尊重論に傾くもの等何れも研究の餘地が少いと思ふ。一、何れを問はず一論せんとすれば先づ眞摯な態度で以て根據を研究し現時の實狀を見窮めて實際に移り然る後云々の問題に與る可きものと信ず。此の意味に於て以下順を追つて方言標準語について究明し我が校に於てゐる方言矯正法方言調査の實際等を述べて見たいと思ふ。

現時に於ても國語即標準語と思惟してゐる人が割合多いやうに思ふ。元來國語と言ふ言葉は標準語と云ふ言葉の同意語ではない。尤も過去には標準語が國語の誰の代表者の如く取扱はれた時代はあつた。而し今日の語學學者はこの理解が力の都合である所謂方言の研究をも可なり重大視するのである。中國や近畿の方言の知識なき奈良や不況の言葉の研究や東海關東の方言の背景なき鎌倉江戸の言葉の研究や甚と物足りないといふ。これはならぬ。國語と云ふものに國內の各方言の統計を求めない方言の研究に基礎を置く。國語の研究は空しくはならない。根柢がない。而して言と標準語はかく對立的に用ひられなければならない。その性質は異なものである。標準語は人によつて定められた語であり方言は自然に行はれてゐる言語である。東京市外に行はれてゐる言葉は東京方言でこそある。此の言葉が種々彫琢され國語は讀本の上に採用せられて之が全國の兒童に軌範的のものとして教へられる。此の標準語にならうとある標準語はかく人為的であり抽象的であり軌範的のものである。此故に多くの方言が超越してゐる。總体的な言葉である。なぜ政府が方言以外に、人為的軌範的な言語を特定するの

いふと、これが大切なる事で、即ち國語の統一によつて國民思想の統一を計る。一傳効果的なる國家觀念、愛國心の養成に資せんとする爲である。國語は之を放任しておけば、方言の分裂を生じ、遂には國民間の意志疎隔の上には不都合が出来、之を統一、統一の達成を計つて國語教育の充分徹底させるために必要であり、又この点より權威を有するものは標準語である。標準語は、方言の如く標準語は、安んずる言語に理想相的の彫琢を加へたものである。或る地方の言語の如く、必ず標準語と名づけることは出来ぬ。之に取捨折衷を加へられ、その如く語らねばならぬといふ事、安んずる言語に統一はなして、この如く語らねばならぬといふ事、理想的標準を示すのである。又標準語は、一國の標準として定られたものである。以上全國の方言に對し、優越的の權威を持つものである。一旦制定され、標準語が永久に不變なるものである。いふ事は、事柄が来々ない時代が、變り事情を異にして来々に従つて、従来のままでは標準語と地位を保つて行く事が出来ず、難くなり資格に欠ける所を生じ来るのは當然である。そこである時期には、改定を必要とする。即ち普通の言語の場合には、その変化は概して無意識的であるが、標準語は、於ては元來の制定が意識的であるのと同様、其の變化も意識的である。其の地方固有の言語に、標準語化にあらざる言ひの論があらむ。又も廣狹義の場合、其の他諸語があるを何故研究する必要があるかと。言ふと、前記の國語學の基礎充實の上にも、大目的はあらず、通例小目的に於ては、標準語化のそのの方言研究であり、亦斯くあらねばならぬのである。明治時代に標準語が、國定教科書によつて全國に普及され、小學校で教授され、結果は今日極めて顯著なものである。地方の言葉は、明治の末期より大正の初期にかけ

かけておまに驚くべき変化と来してゐる。小學校に於ける國語教育の主
的は標準語の自由なる運用にある我等には児童をして卒業迄に標準語を
完全に使用する能力を興ふべき責務がある。しかし事實、完全といふ事は
お遠き理想である。我が國の方言が封建制度によつて一層發達したと
此てゐるが、當時各地の方言と今日の各地の方言とを比較すれば、そこ
雲泥の相違があり、又方言的特色は殆ど消滅したかとも思われ、地方
標準語に近づいて来たのである。特に現代文化の廣くラジオの普及及
準語と方言とが近づいた爲に方言集のなめ純粹な標準語を教授する事
今日及び一層困難になつた。確かり標準語の正体をつかみ、地方の方言
標準語との距離——之を明にし、これに完全な標準語の教養は望
ない故に標準語の正体を理解するものに、方言を捕へて之を比較研究
するのが捷徑だと考へる。前述の目的より方言研究は國語教育の最終
な仕事となるのである。方言調査の必要は別項で述べたことにし、終りに
自由地方の言葉は國語の方言中、如何なる位置を占めてゐるのを見、こ
とが方言研究の第一歩でなければならぬと考へる。而してこれについて公
之れた書物も少く、極めて困難である。今、東條操氏著「國語の方言區劃」下
り記して見る。

東北方言（東北六縣、新潟縣の一部）

小澤東
部方言

東北方言

（小澤の一部、神奈川、千葉、茨城、埼玉、
群馬、栃木、東京府）

日本語

内地方言

本州方言

本州中

関東方言 (山梨の部、長野、静岡、岡崎、豊田、愛知)

北陸方言 (新潟、秋田、山形、福島、群馬、栃木、茨城、千葉)

近畿方言 (大阪、京都、和歌山、奈良、三重、滋賀、福井、山梨)

瀬戸内方言 (岡山、広島、山口、香川、愛媛、高松、徳島、高知)

四国方言 (高知)

土佐方言 (高知)

豊後方言 (豊後、豊前、豊後、日向)

肥前方言 (肥前、肥後、肥前、肥後、豊前、日向)

薩摩方言 (大隅、薩摩、日向)

琉球方言 (沖縄、鹿児島、那覇、鹿児島、那覇)

先島方言 (宮古島、石垣島、及、其、属、島)

琉球方言

方言矯正法

國語教育を一言價値ありしめ徹底せしめらるには標準語によらねばならぬ事は既述の通りである。而し方言にも相當價値あり全然没却すべきでない。決してない。要するに方言は何處までも許容不許容の問題でなくして如何にして矯正して行くべきか兒童の生命を殺すこととなくして如何にして標準語の生活へ馴致すべきかに留意する事が甚だ肝要である。以下我が校の採れる方言矯正の實際を述べて見よう。

方言矯正策としての方言調査

第一に當地方の方言を委員を設け分擔して精細に研究調査せしめ、高等科の子供を通宜分擔して五十音を適當に令ちて主として語彙の調査を調査せしめ、此は標準語を體得しようとするのと方言のついても

を知る必要があるため、所謂方言矯正策としての児童の方言調査を目
としてなされた。標準語と対照出来る語の標準語も記入させし

の方言調査表の活用と不断の努力

方言調査研究の結果はこれと標準語とを比較して対照表を作りその相
異を明かにしてゐる。各教室に懸念級化せる対照表を制作し常々児童に相
察せしめ時には必要に應じこれを指導しその相違点を了解せしめてゐる
方言そのものを生活語として使用したをこれを以て満足な正語と考へ
低学年に於ては特にこの方面に留意せしめ速に相當する標準語を
てこれに習熟せしめるやう不断の努力を拂つていり而して注意すべき
語彙表するに不自由を感じせしめるやうな矯正法で決してない室内
話し合ひ遊びの言葉中に綴方等の場合に折に觸れ極めて自然的に
矯正してゐる

。お話會によつて指導を行ふ

正しい言葉で想を自由に発表する様訓練すること。この方面の矯正
としては大切である。この点から各学級は適宜に学校で毎月一回平日
二十日をお話會として朝會時に各学年より一人宛選出せしめ
させ同時に正しい言葉を身に附かせ、機会や正しい言葉を想を
お話會を多く與へてゐる。

綴方作品と連絡し矯正を計る

綴方作品上に於ては特別使用せずとも何等文に支障を来さず又児童の生
活表現上にあまり不便を感じぬ程度の方言等は矯正せしめてゐる。又月一
回の児童作品研究會の場合にも常にこの方面に留意し文表現上の方言を
矯正すると共に教師相互に標準語を使用すべき及省の機會を計る。

○正しい標準語を正しいアクセントの習得

正しい標準語を正しく読めるようになるべく正しいアクセントで朗読する

ることと、一語と考へ種々な参考書によつて教師自らが正しい標準語

を練習しその朗読手法を授け又標準朗読レコードに時々親しませ相俟つ

つて効果を期している

○小学校生徒中の言語は標準語を原則とする

室内での應答合其の他、学校内での言語業養は標準語でなすを原則と

○先づ教師が標準語を使用すること

教育は教師の反映であるとは崇高でも有り、恐ろしい事でもあるが、

る前に興へねばならぬ教師自らが立派な標準語を使用してあり自ら同

化を興へるやうな事は、いふに児童に求め矯正法の立派な実を樹立して

効果を奏せぬことは事実である、児童には音聲学も文法も今もない、

積極的な教師の正しい言葉を模倣させ聴くは自然に感化誘導せしめ、

なれば充分である、この点我が校では充分に注意し各科の研究會の提

でも教師の方言使用云々の問題が仲々やかましい話題となつてゐる

○正しい言葉を身に聞かせこれをつて模倣させる

なんでもわからない様だが之が方言矯正の王道といふ、持続的計畫的

にして且正確でなければならぬ、要するに方言矯正の最後の目標を方言

絶滅におく人がある、而して各人が公的言語として標準語を使用する能力を

得る事を以て標準語教育の最後の理想と考へたい、家庭の私的言語によ

で立入つて極端に方言を排斥しようとする事はそれは一場の美しき夢だ

あり又無用な仕事であらう寧ろ今日の急務は方言を理解し標準語

正確に教育し得る力ある教師がなければ、眞に矯正の果て譽れらるものと考へる。

方言調査の實際

方言の研究には語彙、語法、音韻の三方面に分ち調べることが大切である。兒童に分類して調査せしめる事は多大の困難にしてその要を得べくもあらず。短日月にしてまとまつたものを作成しようと思へる様な事もある。出来得ない事である。カードの様なものに常々人々の談話等を注意して聞かせ、其の都度気附し語を記入せしめ、これがため調査研究に相當の時日を費へ、又不審に思ふ事あれば教師に相談せしめた。

方言に相當

る標準語もなるべく記入し、対照せしめ、斯くして蓄積せしめ、そのを教師中にて研究、委實を定め、語法、音韻、語彙の三方面に分ち、夫々調査し、又教師側の調査は最初より三方面に分けて調査したのである。を基礎として更に當校で曾て研究せしめてゐた當地方の方言、訛言、一語、奈良縣師範学校御土室「入和方言」國語教育、奈良縣方言「方言の研究」を参考し、適宜取捨選擇を行つて出来たものが別紙「方言訛言」一覽である。

而し終りに一言したい事はこの調査物たちや疎しん完全なものでなく、更に一、継続的な調査に努力して他日に於て、完成を期し、といふ念じてゐる次第である。

方言訛言	正語	方言訛言	正語	方言訛言	正語
名詞ノ部 (傳音上)					
アイ アホングラ アホパケ アヘル アシヤン イツタチ イシナ インギヨ イツカキ イビ イモト エンタツ オンタ オサギ オンゴロモチ オトト オトツイ オトンボ	アユ(鮎) アホ(阿保) 馬鹿 アヒル(家鴨) ニイサ(兎) イタチ 石 印形 ガル(氣) ズビ(指) イモウト(妹) 煙突 ヲス(雄) ウサギ(鬼) ムグラモチ オトウト オトト(三) オトト(三)	オアシ カグラ ガツコ カリワタ カレン カドツケヨ カゾ ケツネ ゲンゲラ ゲンリ ゲベツケヨ ドベツケヨ ゴンボ コオコ ゴミ(糞) ゴツソラ コリ、カンコリ ササゲ サカイキ サイナラ	金銭 ワラダ(體) ガツカウ カル(輕業) 菓子 カド(角) カド(門) キツネ(狐) レンゲ草 ゲンリ(玄關) 一番アト ゴバ(牛蒡) 漬物 グミ(謀) ゴツ(玄關) コホリ(氷) ササギ サヨ(月代) サヨウナラ	エンペツ エーシ オツデマン オツラン オナリ オナリ(氣) オナギ オバヤン オンロ オカン オトツタン オバン オナゴレ カアラ カベ カイ カニン ガサツホ カイル カンシヨ	エンピツ 金持 御粗父様 オナリ 炊事 オナリ(氣) ウナギ(鰻) オバサン ウシロ オカアサン オトウサン オバアサン ゲジヨ(下) カワラ(角) カビ(黴) カユ(粥) カンシ(堪忍) 草叢 カ(一) 氣狂

[illegible]

ツモゴリ	ツコモリ(腰豆)	グ	水	オイトン	私、内
ツボラ	ツマケモノ	ヘル	ヒル	ヨムコト	私、内
ツバケ	ツルベ(釣鐘)	モンメン	モメシ(不綿)	(對稱)	
ツッホラ	ツバキ	ヤネ	ヤマ(樹脂)	オメエ、オマン	君
ツッコ	筒袖	ヤンチギ	ワタ(腕白)	オンドレ、アキン	アナタ
ツクモ	釣合	ユウシ(轡意)	イワレ(鯛)	(中) ソツチヤ	
ツクモ	噴物	ヨンベ	ユフベ(昨夜)	(遠) アツチヤ	
デニボ	デギモノ	ヨメリ	ヨメイリ(嫁入)	(不定) ドツチヤ	
テニマリ	手毬	ヨグミ	ヨモギ(蓬)	(事物)	
テヤナヨ	山頂頑六	ヨシナカ	豊年	(近) コヘラ	
テレイヨ	小皿	ヨウズ	ムシ暑(イコト)	(中) ソヘラ	
トウロウ	トウロウ	ヨダナ	高ダナ(女)	(遠) アヘラ	
ネンジン	ネズミ	代名詞ノ部		(伎置)	
ネンジン	人參	代名詞ノ部		(近) ココラ	
ハナゴ	鼻緒	ワイ、オエラ	僕 私	(中) ソコラ	
ハイ	ハヘ(蠅)	ワシ、ウチ		(遠) アコラ	
ハンボン	半分	ワタエ、アタシ		(不定) ドコラ	
ヒタン	二ヨーター	(複数)		(場所)	
ヒアレ	日影	ワイラ、ワントコ	私	(近) コフロントコ	
フルレキ	フロレキ(敷)	ワイトコ、ワイトン		(中) ソコントコ	
フツキン	フキン(巾)	ワットン		(數詞)	
クロベ	ホロビ(縫)	ワイトコ、オイトコ	私、丹	ナンボ	イツ

動詞

音便・場合 コトモアリ	省略ナル	オセカス	教ヘル	ナイチナル	ナイチナル
アコナル	アロルナル	カドエル	カッセル	ナゼル	ナデル(撫ル)
ネゴチミ	ネガツチミヨ	カヤス	カヘス(返ス)	ナヲス	シマウ(仕舞フ)
モロタ	貰ッタル	カイル(転意)	カヘル(歸ル)	テケル	デキル(出来ル)
アスブ	アソブ(遊ぶ)	ガツンコスル	ウケ合スル	ネカケル	ネラフ(狙フ)
イガム	ユガム	カマヒン	カマフナイ	メガク	ミガク(磨ク)
イノク	勤ク	キヨツタ	来タ	ヤロ	アゲヨウ
イゴク	歸レ	クダブレル	ウタビレル	(形容詞)	
インデコ	ウコカス	ケエス	ギエル(消ス)	アカン	イケナイ
イノス	歸ラカ	ケマス	ウス(消ス)	アンジョ	ウマウ(グアイ)
アンガキ	オ前	コケル	倒レル	ウタテ	ウルナイ
オマハントコ	君	ココゴ	コゴ	エンゲツ	ヒドイ
コレト	彼	シナベル	シナビル(安)	エライ	好イ
(他稱)	奴	セトラウ	セオフ(背負)	ツツナイ	大キイ
アイツ	ウトウタ	タトム	タタム(田圃)	エス	オモシロイ
ドイ	イトル	タンネル	タツネル(尋ネ)	オツキ	オトロシイ
ウトラ	イトル	チナフ	チナフ(金遣)	オトロシ	ダルイ
エレル	イトル	チゴタル	チカツチナル	カイダル	弱イ
オチニスル	坐ル	ツクボル	ウズフマル	チヨロイ	
		ドヤグ	サゲ(叫ブ)	チヨロイ	

ツ オ イ	強イ	ホ タ エ ル	タ ラ シ イ ハ イ カ ハ イ カ ハ イ	ヤ ヤ コ シ イ	コ ミ イ ツ タ
テ エ ネ	タイネイ	マ デ ル	マ ゼ ル (交ル)	ヨ ッ シ ヤ	メ ン ド ウ ク サ イ
デ ツ カ イ	大キイ	ミ シ ト ル	ミ テ イ ル	時 助 動 詞	マ ギ ラ ハ ミ イ
ド エ ラ イ	ニ ク ラ シ イ	ミ シ ル	ム シ ル	イ コ	ヨ ロ シ イ 承 知 レ タ
デ エ ラ イ	ヒ ド イ	ム カ ツ ク	短 ク ス ル	セ ン ト ク	イ ロ ウ (行 ロウ)
ニ ク タ ラ シ イ	ヒ ラ タイ	カ イ ラ シ イ	カ ハ イ カ ハ イ カ ハ イ	可 能 助 動 詞	マ メ チ カ コ ウ
ベ チ ヤ コ イ	ヘ ン テ コ ナ	カ イ	カ ユ イ (痒イ)	マ ハ ル	ラ レ ル
ヘ ン テ コ ナ	ウ マ イ	ガ ツ タ ク ソ ウ イ	氣 持 ワ ル イ	ナ ハ ル	ナ サ ル
ボ ロ イ	マルイ (死ス)	ガ ツ ツ イ	丈 夫 強 イ	(推 量)	
モ ム ナ イ	味 ナ イ	シ ヨ ウ モ ナ イ	仕 方 ガ ナ イ	マ ヒ ヤ ウ	マ セ ウ
ネ ラ ム	ニ ラ ム	ズ コ イ	ズ ル イ	ヤ ロ	ダ ラ ウ デ セ ウ
ノ ド ク	ノ ゾ ク	ス ケ ナ イ	ス ク ナ イ (少シ)	セ ヤ ソ ヤ	サ ウ ダ サ ウ デ ス
ヒ ク (轡 意)	シ ク (敷)	ダ ン ダ イ	カ マ ウ ナ イ (橋)	ヨ ウ ヤ	ヤ ウ ダ ヤ ウ デ ス
ブ ッ ケ セ ゲ ル	ナ ゲ ル (投ル)	チ ツ ナ ヤ イ	小 サ イ	(禁 止)	
ト ヤ ス	ナ ゲ ル (打ッ)	チ ン カ イ		ア カ ン	シ ヲ ハ イ ケ マ セ ン
ヘ チ ヤ バ ル	ヘ タ バ ル	チ ン コ イ	ツ メ タ イ	(便 役)	
ヘ コ タ レ ル	弱 ル	チ ミ タ イ	マ ラ カ イ (敷)	掃 シ テ マ レ	掃 セ テ マ レ
ボ マ ク	ツ ブ マ ク (吹ク)	ヤ リ コ イ			

(指定)

サマサウシマ

サウダ

セマナソマナ

サウデスネ

タセダツサ

サウデスヨ

サウダツカ

サウデスカ

ソウダツナア

サウデスネ

ソウデニナア

サウデスネ

テイナマル

サウデイル

キトル

キデイル

(打遣)

イカヘン

行カナイ

イカヒン

シナイ

シマヒン

シナイ

ユウハツタ

云ツテイタ

ヨウシマン

出来ナイ

(副詞)

シツキニ

ナキニ(直ニ)

センド

長イ間大分

ナヨボット

少シ

ナビット

ナビット

ナット

テンデ

テンド

トウドリ

ドナイニ

ドオド

ナンヤ

ナシカ

ナンド

アラシマヘン

アレシマヘン

イマハル

ギョラヒン

ヤマヒン

ーダンネ

シツテル

シタマロ

少シ

スツカリ(全然)

サツバリ

ツビニ

ボンナニ

ドウツ

何カ

アリマセン

ナナサル

来ナイ

ーデス

シツテル

シタマロ

シタマレ

シナイ

シマンネ

セントケ

セヤロ

セヤン

アンマリ

アイサコイサ

イイマ

イツド

コナイニ

シヨウチュウ

ギョウサン

エロウ

ジョウサン

ヨウケ

クアント

ドツサリ

ナンデ

ニンマカ

(シマス)

スルノデス

マメテオケ

サウダラウ

アマリ

タマニ時々

イイエ(否)

イツカ

コンナニ

カヨウニ

コノヤウニ

シシユウ

澤山

ナゼ(何故)

ニギマカ(賑)

ノツケ	最初ニ	リヨウナラ	一両方トモ	ソレハカハソウシヤ	ソレハカヲソウシヤ
イチハナ	始終(トエス)	デウキリ	是テ確実ニ	【目】一カテ	オ前カテ知ツ
ベツタリ	エラソサエ	イツナ	一采田	テオルヤロ	オ前モ知ツテ
ホロクソ	エラソサエ	ゴウツト	スツカリ	【トモ】一カテ	オルヤロ
ボチノ	エツクリ	シヨウタリ	常ニ	イレモノグチ	イレモノトモ
エツクラ	マツハリ	水ヲモチコイ	水ヲモツテヨイ	セヤロ	サウダラウ
マツハリ	(矢張り)	カヲケドトス	ソコニナイカ	セヤン	サウダラウ
マツバシ	ヨケイ	行カウト思ツタ	行カウト思ツタ	【接】	サウダラウ
ヨウケ	ヨホド	ケド	ケド	カイダルイ	ダルイ
ヨツボド	(余程)	ケドモ	ケドモ	ブチナゲル	ナゲル
ヨタセキ	イセシ(以前)	ケドモ	ケドモ	【雑詞】	ナゲル
シヨートン	ムカフノ人ニ	ケドモ	ケドモ	【終語】	ナゲル
ムコサシ	無暗ニ	ケドモ	ケドモ	ケドモ	ケレド
ムサンコニ	モウ少シ	ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド
モウ少シ	先程	ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド
サイデン	次カラ次ヘ	ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド
セングリ	新シイ	ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド
ミンナン		ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド
サ		ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド
ラ		ケドモ	ケドモ	ケレドモ	ケレド

[illegible]

4. 迷信

イダダク	イタダク	(直音ト拗音ト転換)
キビシヨ	キビス	
シム	シム	
サクワン	サクワン	
ザフコ	ザフコ	
テ	テ	
ハ	ハ	
エ	エ	
メ	メ	
目	目	
葉	葉	
テ	テ	

タイラン	足ラン	
ミカン	ミカン	
テツボ	テツボ	
ゾリ	ゾリ	
サト	サト	
シヨイ	シヨイ	
セート	セイト	
セーネン	セイネン	
ヘータイ	ヘイタイ	
カタクシ	カタアシ	
ヤブリ	ヤブイリ	

動物に供するもの

蛇に指をさすと指がくさる

とかげに指をさすと指がくさる

蛇を指す時は親指です

鬼の肉を食べるとすぐの子が出来る

とかげの尻をつかむと五十銭給ふ

猫が死ぬとその家にふじが入る

朝くもを見るときげんがよい

晩くもを見るときげんが悪い

福蛙が家の中を通ると金持になる

蛇の夢を見るときげんがよい

牛の夢を見るとき風邪を引くとよい

鶏の夜鳴きはふじの知らせ又夜鳴きといふ

鳥が三回家のまわりをまわったらか病氣になる

いたちの道切はげんが悪い

げんが頭をばくとそこだけにはげん

鶴の夢を見るとげんが悪い

商賈に行く時蛇のうずをまいてみるのを見ると、その日は良く儲かる

蛇が自分の右から前を横切るとげんが良い

狐が東から西へ泣いて行くと米價が上り、西へ行くと價が下る

長物を見たらげんが良い

夜犬が遠吠えをすると何か不吉がある

蛇の皮をふところへ入れると金持になる

。猫が年をとると化けイ来る

。狐や狸は人に化ける

。朝様の詔しをしたり見たりするとずんが悪い

。目高を取ると目がつぶれる

。いたちが家のそばで泣くとふじが入る

。蛇を殺したら呪はれる

。蜂を殺すと来るとかまぐと言ふにげる

。白蛇を殺すと罰があたる

。猫を殺すととりつかれる

。蛇は指さしたらすぐ人にその指をふんでもらふ

。くもの氣が高とけると天氣がつづくとも又風が吹くとも言ふ

。晴(朝十時)に今をあづけり阿呆がある

。雲が余長参りすると雨が降る

。鳥が早く帰ると明日は天氣がよい

。鳥が帰ると雨

。ふうきには天氣 三つ雲は雨

。とびが鳴くと雨が降る

。かりがねがとぶと暴風雨

。三輪山の中程にもやがおすと雨

。雲が初瀬参りしたら晴

。鶏が夕方おそくまづえさを食ってぬたうると翌日は雨

。猫が顔を洗ふと明日は雨

。雨の降らない時雨地蔵を川の中へかけると雨がふる

。夜分よく晴れて冷んたら大氣になる。
。庭の石が乾ききつてみると晴れゆくしてゐる雨。

口

氣候に因するもの

。秋の夕焼かまをとげ、

。朝虹に川渡りしな

。月の上りに日の下り

。夕虹立うたら嫁むかへ

。よい虹二十日の日照

。朝曇りは晴れる

。朝のつかり當にやらん

。朝雲の雲行きは晴

。朝雨におどろくなかれ

。朝早く霜折れすると雨

。とび高く空に舞ふ時は晴

。くもが屋外で巣をはると晴

。くもが屋外で巣をはりかけると雨が止む

。鳥がねぐらに急ぐ時は雨

。金魚が水面に浮ぶと雨

。蛙が木に登つてまくと雨

。山から雀がとぶと風

。金剛山上に鱗雲があると寒い

。をんばの根が深い年は風が多い
 。星が水及みすると雨近い
 。猫が顔を見るときは雨近い
 。月が今とさしたる雨
 。大雪の年は夏日照がつく
 。野ねずみが家へ這入れば大水
 。金剛山の雨と叔母の餅とは末ぬことよい
 。ふくろふが鳴いたら翌日はきつと天気
 。下駄を投げて表向くと晴
 。山が近く見ると雨
 。蛇が木登りすると雨
 。朝霧がかると晴
 。鰻が浮くと雨
 。雀が道に下りてえさをさがすと雨
 。石垣やびくびくしければ雨
 。朝虹に川渡りすると雨
 。東の空の雲焼けば雨
 。風が東から吹くと雨
 。鴈が鳴いたら雨
 (大雨のしらせ)

植物に因する風
 植物を作ると風が入る

山椒はうたとうたつてつむと枯れる
 南瓜に指さすと南瓜はおちる
 旅行して竹の皮をすてると足痛がおこる
 枇杷を植えろと植えた人が死ぬ
 人参を植えろと家ぬが一人なつと死ぬ
 天氣の良し年は柿が豊年である
 山豊年・里不作といふ
 ぶどうを屋敷に植えろとより下るとて悪い
 いやうたんとぬすむと悪疾にかゝる
 大初豊年米食はず
 秋茄子嫁に食はず
 (おいしいから)
 (へちまも同じ)

二

神佛靈驗に關するもの
 神或は佛について御身体の御利益特に定れりといふ

例
 この神様は首の神様だから首の願事は御利益下さる。又この佛は牛の佛だから牛の病をなほして下さるといふ
 神社或は佛圖の図子戸或は樹木等へ紙片を結びつくるときは御利益によりて願ひ事叶ふといふ
 殊に男女の縁を結び合ふといふ
 信仰の主体は各々其の好みになる食物或は事物ありとなして願ひをかける時に其の特種の品を持参して進上し己れ此を食断したる時け御利益多しともいふ

神社にて御礼其の他のものを賜りてこれに家に祭りおく時は不時。難
をまぬがるともいひ又は病氣もこれによりて全治すともいふ
。寒中に裸参りとして裸体のまゝ、神に願いをかくる時は如何なる願ひもい
ふふものなりといふ
。伊勢の大神へは他人の金銭をぬすんで参つてもばちがあたらなから
一生に一度は参つておくべしものなり
。俗にいかゞベンズリさんとして佛寺に祭れる赤塗の俣をなぐる時は病氣
をほろ
。七地藏へ参る時は七つの御利益がある
。神或は俣り霊又は使ひの者を殺すとばちがあたる
。天神官を氏神とする家で鶏を食べるとばちがあたる
。御供水といつて神俣に供へし水と有難がり目や目の痛み場所へ塗り
又は飲むことあり
。えんぼのある人は神様に好かれてぬる人なり
。旦の時参りとして髪を乱し、頭に三徳を戴き、その足にローソクをま
。これに火つけし前に鏡及び鉄を吊して神社に参拝し神木又は神殿の柱
に釘を打ちつけ以て仇とぬらふ対者を斬り殺すといふ
。こは婦人の稀に行ふことにて夫又は情夫が愛を他に轉じたる場人に執
念深き女のなすことありといふ。而してその参拝の途中他人を見つけ
らるる時は願事叶はずといふ
。おいなりさまに限つて人にのりうつるものといふ
。佛を充分信仰したるものは極樂へ行くといふ
。御神体につけがれがあれば暴風雨がある

ホ 端午に因するもの

。五月五日の節句の日神様にお供へする菖蒲をもって鉢巻をなせば一年中頭痛しないといふ。

ヘ 七夕に因するもの

。児童は七夕の短冊を書けば文字が上手になるといふ。

ト 節分の行事に因するもの

。豆撒きの豆をたゞみの縁の下に保存しておき雷の鳴りたる時に食すれば感電せずといふ。
。節分の日に蒟蒻を食すれば男子の器用は一年中に溜りたる砂を排えするものなり。

チ 彼岸に因するもの

。彼岸には極樂の門を開けるといって彼岸中に死せば極樂に行くべしと信ずるものあり。

。彼岸の中日には太陽が西の山に没する際より一晝い下ら入るといふ。陰暦に又今日とせる家にて亡者の忌日が彼岸中の日に當る時は「おひがんさん」に當ったとして特に喜ぶものなり。

冠婚葬祭並に其の他凶祝に關するもの

結婚に關するもの

。四悪重悪といひて数へ年四つと十違ひを忌む

。男女同年令をいひて男子の年令の女子より一つ上なるを仲良しといひて此れを喜ぶなり

。土性と木性は相性良く 戌と申とは相性悪く 火性と水性も相性悪し

といひて結婚をさく

。擧式の日に関するもの

。九のつく日は苦情が起るとてさく

。節分の日には善悪をしてもて其の日を喜ぶ

。十月は神無月とて此れをさく

。三月頃は花盛りにて散り易しとて此れをさく

。三日月は黒星、月の二十日は悪いとて此れをさく

。丑寅の方位及び未申の方位は鬼門及び裏鬼門と稱して此れを忌む

。本人の生年の方位を忌む 武徳の方位を喜ぶ

葬に關するもの

。盆の七日より十五日迄に死したる時は途中にて歸り来る生靈に逢ひ

頭を打たる、改を持ちて炮烙を頭に被らしめて棺に入る

。死骸と共に棺に収めべき物品はついで

錢たぐいを所持せしむるは六途の辻毎に一文づゝおくらためなり

かまは道中の草をかり、松は死者の小便錢なり、五穀を入れるは空

を空の用に供するため

。所引を一本たてゝ六途の辻で迷はめたのなり

。一年の中に二人死する時は二人目の時に、二つあること三つあること
避けうたり人等々を入れるくふり。

又

妊娠中の迷信

。懐胎中に火事を見ながら妊婦がその身体は何れか手にて触れる時は
胎児の身体が今箇所に赤き痣を生じ、又葬式を見ながら今様の行ひを

あす時は白き痣を生ずといふ。

。一棟の中に二人以上の産婦ある時は勝負が出来るといひ、勝ちたるも

のけ育ち一方は死すといふ。

。妊婦が死人の湯棺となす時は難産をなすといひて厭ふ。

。子安の地を祈願をかけた腹帯をなまはる時、白色ならば胎児は男子

赤色ならば女子なりといふ。

。妊娠中に交授する時は、嬰兒の臀部に青痣を生ずといふ。

。初産の時に枇杷を食すれば容易に妊娠すといふ。

。その歳の歳徳神の方に向つて産をうさば分娩し易いといふ。

。生後一日又は二日目に五香湯又は落の根と甘草と煎じ汁を吞ますの

も有り、或は体毒下しの粉薬を溶かして吞ましむるもあり。

。数人生れども死ぬ時、又は生児の弱き時等は、その子を捨子とせずく

育ち一人に依拠して捨てて子と捨ててもらふことあり、又その捨てて

もらひ一人の名の一字をもらひて、その子につくるとあり、又生み

のまゝに育ちたる家の子供に着物の端を集めて着物として着する時は

よく育ちといふ。

○ 生児の顔が趣花尊のやうなれば、その子は早く死ぬといふ。
○ 産婦の余り苦しむ時は、夫の着物をさかきまわして産婦に着すれば良い。
○ 姓婦の胸へ針を指すと耳に水さき窪みあり、その子供が生まるといふ。

ル

○ 出生、死亡に關するもの
○ 朝生したる子は出世する子なりとて喜ぶ。
○ 大祝日に生れたる子は出世する子なりともいふ。
○ 子が生れる時は、潮の満つる時とかいふ事あり。
○ 世と死と同時になり、起りし時は、生れ代りなりといふ。
○ 葬列早き時は、あとの死人早しといふ。
○ 鳥哀れに鳴く時は、人死すといふ。
○ 不意の安死に對しては、死押さきたりといふ。
○ 怨みく死したる人は幽霊になつて現はれるといふ。
○ 人の死する時は、人は幽霊と云ふといふ。
○ 悪行して死する時は、地獄の底に行くといふ。
○ 死人は曇光寺へ行くといふ。
○ 寧ろ三人一語に宜しと云ふ。真中の一人は死すといふ。
○ 一人の人が死して其の縁者が読んで死する時は、前の人が後の人を
○ 野に來たりしなうといふ。
○ 池や湖には、ガタロと云ふ。
○ なりと云ふ。

。死したる人に西向にわざせねば極楽へは行き難しといふ。
。人の死したる時に又物を枕の下におかば悪魔来るといふ。
。死したる時屍体の比較的軟かなる人は極楽へ行き得水ど、硬くな水
。人地獄へ行き得べしといふ。
。僅かなこととて死したる時は、魔がさしたるなりといふ。
。死ぬ一日前に自分の屍を埋まる、御寺へ魂が鐘をつきに行くといふ。
。生前に善事となしおきたる者は人に生れ替水ど、悪事となしたる者は
。けものと生れ替うといふ。
。うを言へば鬼が舌を抜くと言ふ。
。埋葬の時墓の中より水が出づる時は、その人は生前に悪いことをな
。しおきたるためなりと云ふ。
。胞衣をすつる際に出産したる動物も、その嬰兒は懼ろといふ。
。善光寺に詣つれば死したる人に遇ひ得ろといふ。
。葬式が卯の日に當れば卯の日産ねしとて早く出棺せば死人亦出来る
。とて普通午後四時以後ならざるば出棺することを忌むなり。
。友引の日も忌む。

ヲ、子供並びに育兒に關するもの。
。つる、め、(長命を望むため)
。井戸又は便所に落ちたる時は、キミコ、しつえと改名す。
。鬼子カ、鬼子女神に祈願してはらみしによる。
。すえ、いぬ、よし、(子多きを忌み、賢、由、末、等の文字を附す。)

あぐり、くうらへ
へ女子列をきて生れる時、アタリ、と命名せば次に男子生れるといふ

7. 月代の形に刺すもの

出産後九日より一ヶ月身体虚弱な小は以後は、小を廢せば壯健となり。
又出産後九日より一ヶ月身体虚弱な小は以後、月代すといふ。
その際、チヨボ残すと身体強壯にあらう。

月代せし髪を人の道路に捨てて人ふす時は頭痛持にならずといふ。
その地、月代せし髪を鳥持去り鳥所より落せば、夜分鳥所より墜落
する夢を見るといふ。

カ、病氣に刺すもの

齒、齧む時に、出ハ字を逆にして三つ書き、其傍に白色に姓名を書
きて口にくわへて齒にささへれば全快すといふ。
目のふちに目ぼり出来た時は、裁縫に用ふるへら又はツカカ櫛をた
みにて磨き、その小を揮ふる時には全快すといふ。
又アツキ三粒、井戸に落すと可なりといふ。又カマドの灰サにて三
度咳くも可なりといふ。
井戸には水神様が居るといふ。水に刺す病氣にかゝる時、井戸に
水をまづれば全快すといふ。

。齒痛の時には算盤玉の上にモグサをくすべて其の灰を局部に塗る時に
は齒痛止むといふ。
。老人の耳が遠くなれば長命する兆なりと云ふ。

三、

旅行に肉するもの

。出發日は七日、九日、二十日、其の他四の字のつく日をきらふものな
り。

四、

衛生に關するもの

。くしやみが出るものと一はめ、二ぞしらぬ、三笑は小て、四風邪ひくし

。食べてすぐ寝ると牛になる。

。傷の血を鳥に見られると傷が重くなる。

。蜂にさされた時、刺顔の汁をつけたらよい。

。頭に白墨の粉がつくと、はたけしにある。

。子供のはざりは父母に早く別れる。

。風呂に入つてゐる夢を見ると風邪をひく。

。薬が人の口を北向にすると、薬が利かない。

。蜂にさされたら齒くそをつけると良い。

。大水の夢を見ると風邪をひく。

。莊物に行者落をつけるとよい。

福がへるに手をうけると、いほみが出来る。
いっかきと頭にかぶると、せが大きな子。
下村のお地蔵さまにお参りする子、男か女かわかる。

鳥爪を霜やけにつけると、尾が生える。

寝てものを食べると、茶碗に水を入、箸を十文字にして四つの口から水を

呑むとあはる。

頭を王をやくと、氣違になる。

めくら石と拾ふと、目がつぶれる。

鳥の鳴き真似をすると、あぐちがきれる。

さかむくれいと、伯母さんにきらはれてゐる。

夜、爪をさると、親に早く死に別れる。

猪の肉を食べると、くさが出来る。

獅子舞に参るで、もらふと、いぬになる。

神飯の時、伸びをしたら、刃体ふい。

野菜を食ふいと、血の筋が切れる。

胸のござを取ると、腹痛と出る。

佛の耳をなでて、自分の耳をなでると、耳痛がふける。

あぐちが切れたら、鳥に、昨日がつたあぐちかやそ、といへば、なほる。

かぜをひくと、王子通ふといと、良い。

ち便所へ行くと、たくなると、軒下へ、子供留守と書いて、倒にはると、病気に、

はしかがはやると、軒下へ、子供留守と書いて、倒にはると、病気に、

あかい。

鉢合はせすると、もう一度せかければくきが出る。

胸へ手をうせて寝ると、悪い夢を見る。

血が出たら、血止め草をつける。

咳が出たら、いふごを焚いてのめばよい。

子供に疳虫には、蜂の子を焼いて食べさせる。

火傷をする、と、香油をつけたらよい。

咳が出たら、へちまの水をのませる。

便所で唾を吐く、と、鼻くそが出る。

寒の水は、薬へ夏に水あたりせんといい。

人の足の裏が、くといひせんにある。

目の病に、雞の肝がよい。

蛙を潰して、つけるとくきがなほる。

人げ車の陰干は、洗粉にしてよい。

切りきずには、袂くそをつけたらよい。

目おちこは、黄色いつげの櫛を疊のへりですり、暖めたらなほる。

腫物は、からたちの刺をつぶす。

腫物には、十薬の葉を焼いてすり、はるとあほる。

大葉子、根を煎じて吞むと、腹痛がなほる。

足がしびれたら、つしびれ京へいぼれ。今日は京の祭や、と、いつてあで

ろとあほる。

しびれがきれたら、ひたひへ唾をつける。

くわりの人の實は、風邪の薬にある。

腹がいたくふると、まむしの手であでるとあほる。

蜂にさ、小ると地面に○をきき、その中に十の字をかき、その真中の上
 をつける。
 しやくり一日したら死ぬ。
 目ぼが出来たら井戸の神さまにざつを半分見せろとふぼる。
 漆にまけたら油揚げをぬりつけて、それを焼いて食べる。
 やけどすると灰をつけるとよい。
 風邪をひくと干菜をくすべると風邪の神が逃げてゆく。
 蟹子を便所に吊つてさくとき、ひきつけのまじふにふらう。
 雨を降った日、北むいていともかまねをするとき、どもにふらう。
 融に、おちうをかまき小たら顔がはれる。
 蜂にさ、れた時、まいもの葉をこすりつけたらよい。
 目にほこりが入ったとき、肩をなめるとあまう。
 風邪をひくとねがひ根を焼いて食べる。
 霜やけに鬼の毛を一つけるとよい。
 蜂にさ、れた時、よごみ葉を一つけるとよい。
 霜やけには、たこやうでた汁を一つけるとよい。
 目にほこりが入ると、束むいて唾を二へんぼくとよい。
 大きい茶碗でたべると、大きい口の子が出来る。
 便所をきれいにするとき、小さい子を食べる。
 風邪をひいたらうめぼしを焼いて食べる。
 十五夜の夜、猿沢池へ足を一つけると霜やけがふぼる。

レ 雑の部

。養子三代續けば金持になる。
。娘三人かたづけると屋根の棟おらる。
。四疊敷の座敷は悪い。
。かまどを東向きにたくと悪い。
。門先からうらの見える家は悪い。
。足の拇指より次の指の方が長い時は、親より出世をする。
。夜笛を吹くと蛇が来る。
。夜爪をつむと親の死目にあはれまい。
。午後新しき寝物をおろすと不吉なりといつてかまどの前ずみをつけり。
。火事の時牛をやくと縮毛の子が生れる。
。手の小指の爪を長くする時は記憶良しといふ。
。俵に供へたる飯を子供に食はしむる時は記憶悪しとも又縁遠しともいふ。
。着物を新調したる時は家の心柱にて衿をする時は衣服に不自由せずといふ。
。流星を見た時、手枕をすりまねるせば、枕はずさずにねる。
。夜の昆布はよろこんぶとて見のがしをらぬとて皆で食べる。
。つばめが新しく巣を作る時は家人死す。
。秋にお金入を新調する時は空さいふとて金たまらぬといふ。
。藝者は紅葉や朝顔の模様の着物は着ない。
。田植の夢を見る時は身内に死人あり。

。あんなつけ餅の夢を見た時は死人あり

。歯の抜けた夢を見た時は死人あり

。朝嫁入を見ると不吉

（下の場合）身下

（上の場合）身上

。櫛を拾いと不吉

。鉄瓶の口を北向にかけるとげんが悪い

。流屋を見たら不吉

。北枕にぬたり 北向に着物を干すと不吉

。三人で眞實を寫すと眞中の者が早く死ぬといやがる

。水に湯を入るとげんが悪い

。雷がなると外へ鉄を出しておくとよい

。鳥居の上に石子のせると子が出来ぬ

。悪い夢を見たら朝早く唯かに話してしまへば良い

。うどんげの花が家の中に咲くとふじが入るといってさうい

1. 衣服

生活改善の上から衣服の改良問題も随分久しい間の懸案になつてゐる。我が郷土で働いてゐる農村婦人の服装も改善しなければならぬ。莫が澤山あると思ふ。男子の服装は従前よりは合理的になつて來てゐる。最近注目すべきは夏の簡單服と農村婦人のモンペ着用である。特にこの一年衣料切符制による制限と、スフ材料の新興により廢物利用による手縫の簡單服の見られるのも新傾向である。モンペ服の着用は戦時下の新流行とも云へるが、婦人の作業服としては最適と思ふ。單に一時の流行に左をされることなく、着る者自らが現在の生活様式に最も合理的な流行を作つて行かねばならぬ。

子供の服装は四五年前に比較して男や女に非常に進歩してゐる。今少科學的に郷土の衣服について調査したい。

1. 衣服の材料

1. 春秋冬の衣服材料

男 木綿、鉛仙、御衣、桐生、枕丈絹、大島、羽二重、セル、スフ等

女 男子同様の他

ナイス、モスリン、シヤリム、ス、紋錦紗、金紗、バレス、小浜錦紗、米子縮緬、東雲

錦紗、コーラン、錦紗、スフ、人絹等

2. 夏の材料

男 木綿、帷子、上布、縮緬等

女 其の他に、縮緬、縮緬、ジューゼット、クレール、米子、ジューゼット、ボータ、スフ等

次から次へと新しい生地が出て来るが、新興纖維スツ材料が混織されてゐるものが殆ど出て實用上甚だ弱い。特に毛織物、木綿物の手に入るものは甚だ困難とされてゐる。最近若い人達の柄は大體大柄となり、色彩は特に濃厚となつた。

衣服の様式

職業によつて衣服の様式は自然定められる。又同じ職業でも年令の差で違つて来る。一概に分けることも出来ないが、職業別に區別して見ると、

男子

農夫		商人		官公吏銀行会社員
春	秋	夏	冬	
股引にシャツの上に單衣の半ズボンにシャツ 引張り 若い人はズボンに シャツ 上衣	股引にシャツ 若い人はズボンに シャツ	ズボンにワイシャツ 給、綿入の長着に厚司の 羽織を着る ズボンにジャケツを着る	メリヤスのシャツ 股引の上 に綿入の半引張り 或はズボンにジャケツ又は上 衣	洋服

家 庭 内 の 場 合	外 出 の 場 合
袷かセル長着の上に割烹服か事務服を着用する。その他に襟をかけぬか筒袖のままにて作業。	下着に長襦袢或は半襦袢を着、帯、腹合せ帯、名古屋帯をしめる。合シヨールをする人もある。
若い者は殆ど筒單衣を着るが、中年老人では半纏を着る人もある。	單衣を着る。長襦袢と單衣羽織の着用は大分少くなった。帯は單衣帯に名古屋帯多く、洋服の外出者も若い人には多い。
夏から秋に入り頃は單衣物を着る。作業中は春に同じ。	秋から冬にかけての服装は多種多様である。(セル單衣、裾に單衣羽織を着る。
老人は綿入の筒袖に袖無又は綿入の半羽張りを着る。若い者は袷の上に羽織又は事務服を着る。	春の服装の上に、羽織、フットを着る。着物の色彩は春より濃厚となる。

若い女の人の中には最近外に出て、職業に従事する人が多く、自然洋服の着用者が目立って多くなつた。農家の婦人は大体外に出て働くが、最近

和服の上にモンペを着用してゐる人の多いのは新傾向である。

男や共に事務を取る時は洋服を着用してゐても、家庭内で寛雅な気分を養ふには何と云つても和服を捨てる事は出来ない。農村としては全体的に質素であるが、服装全体の調和、服装に個性味を持たせよう美から言つてまだ、幼稚でありほしくないかと思ふ。

ハ衣服の整理保存について

衣服の整理は一家の主婦の大きな仕事である。絹物や洋服等素人で困難と思はれるものは、洗濯屋に出されるが、その他は皆主婦の手によつてなされてゐる。

○衣服の整理について

二月リ一部素麺をされてゐる家の外は冬籠り、その間に汚水物の始末を全部して置く。

四月リ張物へ板張（伸子張）

八月リ衣具の洗濯 虫干し この地方では土用干しと云つて八月中に行

ふ、梅雨期に湿つぽくなつた衣服を乾すのが目的であるが、この頃は害虫が盛に繁殖する時期であるから油断は出来ない。出来れば十月か十一月頃が適當である。乾燥を徹底的にしやうと思へば一二月頃である。

○衣服の保存について

簞笥、長持、柳行器等が主な容器である。防虫剤は普通ナフタリンを屢用されてゐるがあまり効力はない。絹毛はホドゲン錠、樟腦を用ゐてほ

二、冠物について
冠物についてはあまり流行もなく本村としての特色もない。
男子

農		商		官公吏、会社員等	
春	麦藁帽子、檜笠、ほ、かむり	鳥打帽、中折帽	中折帽	官公吏、会社員等	
夏	春に同じ	麦藁帽、カンカン帽	カンカン帽	カンカン帽	バスマ帽
秋	春に同じ	春に同じ	春に同じ	春に同じ	春に同じ
冬	モ抵ほ、かむり、帽子、頭巾	全	全	全	全

女子についてはあまり取立てう程のこともないが、女子が野で働く場合、檢査、手拭を冠る。又女子は帽子の代りにパラソルを用ふ。最近晴雨兼用のパラソルが多くなつた。又女子でも洋服にて通勤してゐる人は婦人帽を冠つてゐる人も見受けられる。

子供

男児は大体夏は麦藁帽や布の帽子を冠る者もあるが、大体四季を通じて黒の學生帽を冠る。女児は段々洋装になつて来た爲、帽子の型も自然洗練されたものを冠る者が多くなつた。春秋には糸細毛糸、冬は毛糸にて編んだものを冠つてゐる者も多い。

履物について

履物は種々雑多である。一般農家では大体牛製の藁草履を作業中履く。昔は殆どが藁草履を履いてゐたものが、ズックや地下足袋、最近ズックや地下足袋が流行してからあまり用ひられなくなつたが、最近ズックや地下足袋が流行してから、藁草履の需用がすばらしい。

くなつた。學童も踏天は草履、雨天は下駄履が普通となり、一般女子が洋服に下駄履も初は奇異に感じられ水にものが今では公然と認められ、特に夏期には多く見受けられる。雨天時のゴムの長靴も古い品を持つてゐる者の外は殆ど入手困難であり、たゞ高價に入手しても再生品の爲質が悪く持久性に乏しい。履物も事変以来の变化は著しい。

七五三の宮参り

大体この辺では生後十一月に行ふ。親元から戴いた絹布一反で四つ身仕主とする。

男子は裾模様の黒紋付の打かけ、身介相應

女子は友禪の打ちかけに下着、文を着せ氏神様にお参りする。

六十一歳の年祝の服装

子供に生れ変わるといふので羽織の胸紐より袴、バツ下着一切より下駄の鼻緒まで赤とする。それと黒紋付の羽織を着る。

婚礼の服装

男子は紋付羽織、角帯、白足袋

フロックコート、モーニング

女子は本来は白羽二重襲で振袖であつたが、現在では白襟、黒紋付模様に白羽二重二枚龍衣に丸帯が普通となる。俗に言ふニ三歸りは此の裾模様を指す。

葬式の服装

神葬、喪主は黒、束帯

親族男子は黒紋付羽織
下は黒袴、黒丸帯

・佛葬 喪主は白の上下を羽織る。草笠をかむる。

親族男子は喪主に同じ。

女子は神葬に同じ。以前は白羽二重に白の丸帯。
子供は白羽二重に白の帯

・天理教葬

喪主は黒装束

親族の男子は白鳥といふ白の教会服を教会から借りて来て着る。
草笠を冠る。女子、子供は神葬に同じ。

禮服は純美な國俗習慣を採つ上に大切なものである。日本服は確に日本人にふさわしい一つの立派な藝術である。

併し常用服については改良の余地がある。衛生上、作業上、經濟上合理的でないといはれてゐる。体温調節、身体保護の衛生上から見て、安穩なもの、着付け上から簡單なもの、運動作業上から見て適合したもの、その上更に禮容裝飾の美觀の上から美しく高雅なものであつてほしい。

2. 食物

農村料理は一般に脂肪と動物性の蛋白質に不足傾向である。過激な運動に對して充分な栄養と睡眠を取らない爲に、身体をこわす場合が多い。偏食が多く、最も勞働の激しい農繁期に自給品のみにて過し、かへつて農閑期には食物の方向も少々、時間を費して考へられるといふ有様にて、兎角植物性食物と動物性食物の偏食されることが多く、自給食品の料理

の研究と身体の過勞を治す栄養食品としての知識が必要だと思ふ。
農作物に恵まれた我が郷土の食物は別段と濟しうしてその色彩はない。左
の五項目について調べて見たい。

1. 主食物

農家では昔は大体麥飯を食してゐたが、穀類消費額を食する家が減少し
米飯の家が大部分となつて居た。近時米が配給制となり、節米の叫はれ
てゐる折として、商家も農家も共に麥飯を食し、尚不足分は饅頭、素麺、
その他より、粉や馬鈴薯、甘藷を用いた代用食が工夫され、戦時下食料政
策に對應されてゐる。

農繁期には朝晝晩の外に、おちやと、つて山間に二度食べる。(朝は粥、
午後は飯) 農繁期は過ぎると朝晩は粥で晝は飯を食べる。

2. 副食物

植物性食品

野菜類 大体農家では自家用蔬菜を以てこれらので特殊なものはない。
大根、人参、落葵、春菊、菠薐草、白菜、青菜、甘藷、豆、芋、馬鈴薯、里芋、玉葱、大豆、かんべう、らっきやう、
茄子、胡瓜、南瓜、豌豆、甘藷、馬鈴薯、里芋、玉葱、大豆、かんべう、らっきやう、
大体以上の様な野菜が取れるが、大根時には大根ばかり、菜っぱ時には
菜っぱばかりといふ様に偏食になり易い。同じ物を大量に作るよりも、
種類を豊富にして偏食を少なくしたい。

野生植物

せり、三つ葉、よめな、よもぎ、つくし、菌類、わらび、ぜんまい、いたどり、山百合、藤、
根、落うど等。

塩醬油砂糖ソー入味噌酢鰯節昆布味の素煮干等

飲料水

飲料水としては大体井戸水を使用してゐる。中には山の谷川より流れて来る水を樋にて引いて来て取水を使用してゐる家も多少あり。今その調査の結果を示すと、

	宇陀	桑名	内子	本	本	黒崎	黒崎	竜谷	柏	岩坂	望間	守田	合計
井戸水	二五	九二	四五	二四	三二	四五	一	一九	一九	四	四	一四	三八〇
取水	〇	一	二	〇	〇	〇	六	三	九	一	〇	二	五一
井戸水	〇	〇	六	〇	一	〇	〇	五	三	一	〇	〇	一六

洗濯用として井戸水の外に川水を使用する家も多い。大體に於て井戸水は水質良好にて濾過しをければ使用出来ないう家は殆どない。

へ禮式に關する

食物一特殊約なもの

婚式の時 餅の吸物結び昆布又は鰯節煮干鰯酒、鼻衝飯等

賀の親

餅の吸物、鏡餅組重煮豆数のうち茶湯等

葬式(仏式)

油揚げ、ヒロス、椎茸、メ(落葉)は必ず用ひ、宗族により四つ餅を用ひ

神式

油揚げヒロス代りに粟類を用ひ、他は仏式に同じ

大體商賈に見式に關する、特殊な食物についてのぐたが物資不足の折、現在では最密に行はれなう場合が多い。

3. 住居状況

人の日常生活について地理學的に研究すべき事項は大変に多い。殊に郷土を科學的に研究する上から言つて衣食住の問題は特に大切だと思ふ。住家についても研究すべき事項は非常に多いが、殊に家の位置及び方向の勾配建築材料が主なものだと思ふ。

1. 家の位置及び方向
 入口の向きを表に現して見ると

	東向	南向	西向	北向	軒数
宇陀	三	一	四	一	三
慈恩寺	一	四	一	五	一
町内	一	四	一	五	一
脇本	一	一	一	一	一
脇本	一	一	一	一	一
黒崎	一	一	一	一	一
黒崎	一	一	一	一	一
竜谷	二	二	二	二	二
狛	一	一	一	一	一
岩坂	一	一	一	一	一
笠間	一	一	一	一	一
安田	一	一	一	一	一
合計	四	三	三	三	三

都會地に於ても農村に於ても位置を決定するにはそれだけの理由がある。即ち山川森道隣家の位置恒風の方向等より考へられ決定される。今右の表について考へて見ると、宇陀寺は慈恩寺脇本の黒崎の町筋は東西に通ずる縣道に沿つて兩側に南北向きに建てられ、内垣内は三輪山を背景として南向の家が殆ど占めてある。狛岩坂は一つの谷を中心として、山を背に東面及び南面してある。竜谷は小腹に大抵南面して各所に点在してある。

口。家屋の用途の上より見て

この地方は大部分が農家である為、母屋と納屋は別棟と同じ棟続きになつてある家とある。母屋は普通家族が住居してゐて、物置は耕作に必要な器具が入れてある。今納屋の有無を調査して見ると

納屋の有無	宇陀市	葛城郡	本郷町	黒崎町	音谷	狛	岩坂	笠間	安田	合計
あり	0	59	34	19	27	41	26	23	9	19
なし	8	5	3	2	5	0	24	23	23	3
調査数	31	125	51	26	33	48	27	27	23	33
戸数	31	125	51	26	33	48	27	27	23	33

竈

普通土間に土又は煉瓦で築かれ、電気又はガス使用の家は無く全部薪を使用してゐる。

流し場

竈のすぐ側にあつて種々の調理をする。明りを取る為に前に硝子又は紙障子をはげりれてゐる。井戸が屋外にある関係上大きな臺を横に置いて、その水に水を蓄へ色々の用を足してゐる。又棚を設け種々の器具の置き場所としてゐる。

便所

便所は多く風呂場と一緒に井戸より離れた所に別棟として建ててゐる。全部が汲取式である。

井戸

[illegible]

井戸が屋外にある方が多く、地方によつては全部屋根をこしらへてある所もあるがこの地方では露天の所が多い。

建築材料

全部の住家の木造であつて附近の山辺から取れる松杉櫟が主な材料である。櫻、櫻、竹、横根等も場所によつては使用されてゐる。

住家の屋根材料の調査

	宇陀 町内	志摩 町内	本 町内	黒崎 町内	竜谷 町	狛 町	岩坂 間	安田 町	合計
見 葉	二九三	二五一	一七五	三八八	三七	四一	一二	三二	三七
ト ン	一四	一	〇	四〇	一	一一	〇	〇	四三
瓦 と 藁	一	二	六	七一	二	三	八	三一	一七
杉 皮	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇	一
瓦 と 杉 皮	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
調査軒数	三一	五一	六三	四八	二七	二二	三五	五四	四八

おの表について見ると。

殆ど農家が三分の二を占めてゐる本村では瓦葺

のみの家は約半数他は藁と瓦及び藁と杉皮を以てなされてゐる。八尾恩寺町杉皮十二軒は半島人部落である。

木屋根の勾配

藁葺の家ではその性質上自然雨を流すのに急な勾配を必要とする。關係上概して瓦葺やトリ葺の家には比して急勾配になつてゐる。急な勾配は雨に對するはかりでなく、自然屋内の温度調節の上にも關係あることと思ふ。

へ床

日本建築では板を張つてその上に疊を敷いてあるのが普通である。普通一般の家では床板の張り方も粗雑になつてゐるのが、一部養蚕家で養蚕期に疊を上げて床を露出し、そこで養蚕を行ふから床板の張り方も丁寧である。

ト、家屋の壁

一般に従來の我が國の家屋の壁は泥を用ひて作る。即ち泥壁である。余り風雨雪等について特に考慮する必要もないこの村では余り厚いものも又特別なものはない見受けない。

細い竹を格子に組合せてくくりつける。一般にすだちすると云はれてゐる。

壤土と藁をねつて荒壁となす。

壤土と藁スサをねつてぬる。中壁となす。

最後に上塗として石灰と締スサ、フノリ、紙スサをねつてぬる。

普通に白壁とはこんな順序で作られてゐる。

キ、二階及び平家建築の調査

戸数	調査	二階建	一階建	宇陀市
三	一	一	七	宇陀市
一	四	三	二	宇陀市
五	九	三	二	宇陀市
一	四	七		宇陀市
二	二	五		宇陀市
六	一			宇陀市
三	三	一		宇陀市
三	二			宇陀市
四	三	九		宇陀市
八	九	九		宇陀市
二	一	一		宇陀市
七	三	四		宇陀市
二	二	六		宇陀市
二	一	七		宇陀市
二	五			宇陀市
三	二	三		宇陀市
五	四	一		宇陀市
四	二	二		宇陀市
一	一	一		宇陀市
六	五	一		宇陀市
四	三	一		宇陀市
八	六	一		宇陀市
三	九	四		宇陀市

農村一般がそうである様にこの村でも可成充分な地面をもつてゐる爲に
 都会地に見る様を上への必要を感じないのであり。二階建築は甚く少
 い。

二二 衛生

1 總説

個人的見地より云ふも亦社會的立場より考へるも衛生保健の必要なる事は今更云ふまでもないことである。そこで本村國民學校児童の栄養方面の施設は勿論本村に於ても之が思想の普及と實踐に努むせられざるべからず、我等は日常生活に於てその趣旨を体し一層之が徹底に留意せねばならぬと思ふ。

2 本村衛生施設

○ 腸チブスの豫防注射

年々發生する傳染病患者の中最も多いのは腸チブスであるので村民全部に月を定めて施行する。

○ 下水ぎらへ

傳染病發生の場合その附近の井戸水を消毒する。

○ 井戸消毒

國民体力法に基き乳幼児並に青年の体力検査を行ふ。

○ 婦御者に對する健康診断

結核の撲滅を期す為婦御者に對して健康診断を行ひ罹病者發見の場合には注意を與へ治療に努めさせる。

○ 壯丁者に對する豫防検査

壯丁者に對しては、トラホーム、花柳病、骨の病氣を調べ、これに罹る者に對しては積極的に治療をあたへて全治に努む。その結果花柳病

一昨年一名、昨年は無し。トラホームは今まで約一割の患者があつたが漸次減少してゐる。
 驅虫剤の服用
 健康週間中に驅虫デーを設け、學校に協力してマワリをのませる。服用者は約二〇%。
 毎年定期又は臨時に大清潔法施行
 3 傳染病

	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年
腸チフス	二				一	
バラチフス		一	二			
赤痢			一			
デフテリア		一				一
流行性腸炎					一	

方面委員の活動

1 總設

方面委員は制度の定むる處に従つて一般國民をして國家の聖澤に浴し、
しと思患を蒙らしむる様轉旋努力せしむるものてあるから失業若しくは職
を與へ衣食に窮するものには衣食の料を給し貧困で醫療を受ける事の出
来ないものには之を恤ふ等常に其の地方の生活狀態を調査し緩急をらし
きを得る様盡力しなけれはならぬ。

2 方面委員

昭和二年十月設立最初 尾上伊太郎氏方面委員に任じ次に 山下弥次郎
氏就任現在では 中村房次郎氏昭和十三年四月より更に小坂龜太郎氏就
任し二人で地域的に分擔してその仕事を司る。

3 本村の方面事業
。救護法による救護

。行路病者取扱
。恩賜醫療救護
。済生會
。精神病者監護法

實人員 五名
延日数 三、五、六、八日
費用 四、五、五、六、二円
八円

延人員 三名
實人員 五名
二名

其の他の指導幹旋

児童保護

身上相談指導

戸籍整理

就職幹旋

え等の指導幹旋は二軍間に約二十坪
事更以後新に加けり。ものとして

軍人援護

出征軍人に対する慰問文並に慰問品の募集 傷病者に対する見舞
傷病軍人 出征軍人家族 戦死者遺家族 徴用者並に満蒙義勇軍家族
に対する生活扶助 醫務増援助 助産 育英 身上相談等を以て之等の
事柄を行ふ爲団体として銃後奉公会（昭和十四年四月）が誕生し銃後
相談所が設けられ専任職員が之にあつてゐる。

西阿公

西阿の活動時代

延元元年、皇興南狩のその時より、後村上天皇の興國二年に到る六箇年である。その頃強敏治なること鬼神の如く、その行動は、京都の安否に關する所として京賊を震駭せしめ幕府として少からず狼狽憂慮せしめたのである。而してこの最活動時代の數年前たる元弘時代の狀態の真相は史料欠漏のため不明であるが、建元元年正月、大塔宮の令旨を奉し奈良興福寺と侵し南都を襲撃した点から考へると、元弘當時より相當忠勤を勵んでゐたのであらう。

2. その當時の吉野朝の御勢力

京賊の專横跋扈最盛なりし時代で、吉野朝にとつては勢力最も窮蹙して皇運の衰へさせられた時期であつた。

楠木正成は湊川で戦死し 延元元年五月

新田義貞は藤島に敗れ 全 三年七月

北畠顯家は摂津に死し 全 三年五月

吉田定房卿 相次いで病死 延元三年正月

坊門清忠卿 相次いで病死 全 三年三月

後醍醐天皇も亦御悲歎御惱極りなく

こととはん人さへ稀になりにけり

我が世の末の程ぞ知らるる

と御製し給ひやがて南山の杯土に恨を止めて神去り給ひし時でありし

延元四年八月

後村上天皇御齡十二才に亘らせ給ひて御世に即か

吉野朝廷前内大臣
右大臣

3 西阿公の精忠

此し時であり、南風、甚だ競はず衆情最も沮敗した時であつた。

皇子宗良親王は駿河甲斐信濃より越中越後に入り給ひて流離艱難只管回復に當りてあつたのであつたが未だ兵勢整はず京師回復は至難とされ、懷良親王も五條頼元等も率ゐて九州御平定の途に着かせられたが日向の海岸に空しく歳月を過させられ、北畠親房亦常陸の小田城に據つて興良親王を迎へて官軍振ふに至りしも有力なる賊軍に支へられ、新田義助、兄義貞の意志をつぎ北越の残兵を収めて越前には戦ふと雖も到底強賊をぬく能はずして吉野に歸り、勇將畑時能は越前伊知山で戦死し、橋本、和田、橋本、大塚、岸和田の楠軍根拠河泉で活動するありと雖も總帥の正行十六才の年少にして武力練成期で京賊に當る機にあり、新田義氏は右見に、金谷經氏、大館氏明作豫に、花園宮は上佐に、雄心勃勃々義兵は叫合してゐたのであるが、何れも賊勢盛んであつて、大勢を左右することができなかつた。西阿公は強大なり敵勢に當り頑強にして、敏治鬼神の如か、有情勢にありし際、強大なり敵勢に當り頑強にして、敏治鬼神の如き、大楠公の下赤坂城さへ僅か旬日を出でずして落城せらるに戒重附近の平地の要害堅固なりとる城郭により、約四ヶ月も強敵なる抵抗をつづけしとは、足利幕府として憂慮狼狽せしめ、各地の義軍に多大の衝動を與へたのである。然し西阿公の精神には私心なく公利心なく勝敗の數もなく一族興隆の數も眼中になかつた。たゞ藩屏負託の至誠にもえて、大義大節に殉じ一死君命に應へ至尊を擁護し奉るといふことは西阿公の終始一貫した大信念であつた。西阿公が官軍勢力の不振に際し敢然屈起し、危局を救ひ行在を安らかしめ以て天下の義軍を激勵したこの

大信念の発露に外ならなかつた。

さればこそ、克く寡を以て衆に當り、寡を強敵と斥けて赫々たる戦捷を博したのであつた。足利直義が、部下の饒將を選んで雲々西阿攻撃を命じ、吉野への通路を開かんとせしが、賊兵内心恟々として躊躇遷延し多くその機を逸したりが如きは西阿の大精神に抗するを得なかつた爲である。斯の如き精神と行動は實に千古に垂るべき皇國の精華であつて、恰も大楠公の精神と同一無二である。大和の大楠公と稱するも過言ではないのである。

々西阿公勤王の事蹟

○元弘二年七月頃

護良親王の吉野に城き結ぶや、令旨を奉りて、直に之と呼應し、忠節に任じたのであらう。

○元弘三年二月

吉野落城直前の前衛戦に於て彼の高州行秀、同快金、木本宗全、松尾寺衆徒等が、中渡足平を奉じて早茂山辺方面より進出し、激戦が行はれたが、この時西阿は、之等の官軍並に西隣の高取城の越智氏と終始密接なる連絡を保つて共同作戦に當り、例年事々として立つてゐたことは、各方面の事情から推知せらるゝのであらう。

○建武元年三月

興福寺、金勝院實嚴の手記によると、十三日夜春日の神太寺に進発し、同十七日入洛せんとした。之れ護良親王が収て足利高氏と渝かんとし終ひ、内々隠密の議を以て、諸國へ令旨を發せられた特で、西阿も命を合んで興福寺鎮を侵略し、南都と舊都とせんとしたので、例により

興福寺は神木を剽産して之で強誅するに至つた。
細川顯氏に幕命により西河攻撃の爲に入朝に進出したのでありが、顯
氏は荏苒日を空しくしたため、十九日遂に、神木の入洛をみたのであ
る。(一七卷冊子)

○延元元年十二月二十一日

後醍醐天皇京都の花山院亭より密かに大和内山永久寺に入りせられ、
ついで河内の東條に入りせられ、守いで楠宮の一族と従はせられ吉野
山に潜すせられ、や、西所は、眞木定親等と共に馳せ奔りて、望雲寺
守護し奉り、且勅を奉じて、只管吉野朝の前衛を以て征じ、京賊を
して大和道より一步も吉野へ侵入するを得ざらしむるやう防備を固く
した。

大平記

吉野の大家を詰りひて、君を入進らせんと思ひて、景繁則ち吉野へ行
き伺ひ、當時の宿老吉水法印に此由を申しければ、暫くも猶豫あるべ
からずとして、若大衆三百余人皆甲冑を帶りて、御迎ひにぞ参りける。
此外柿原正行、和田次郎、兵衛(牧野)定親、三輪西河、紀任國には恩
地牲河、意志満次五百騎、三百騎、引きも切らず、面々馳せ参りける。
間、雲霞の勢を腰裏の前後に囲ませて程なく吉野へ臨幸なる。春雷一
度動く時勢の咄々然とす。心地して、聖運の地に開けて、功臣、既に興
れぬと、人皆歡喜する。思ひをなす。

○延元二年正月十八日

賊將石橋和義は南都警固のため、直義の命をうけ、兵を率ゐて奈良に
駐す。次いで直義は更に朝山の京連に令して石橋和義を援けしめた。

之れ西阿が吉野朝の命と奉し、傘々出でて、興福寺領を押領し、大和の官軍の志氣頓に振つてゐた爲である。

。延元二年六月二十六日

南都警固の賊黨狹間正供、出羽泰貞、宇都宮常陸介、戸次二郎入道等は西阿並に西阿と氣脈を通ずる内山永久寺及び桃尾山龍福寺等の衆徒など大和の官軍を河上郡標本に撃ちて激戦あり、官軍の攻防夜襲等翌七月二日まで連續し、兩軍の死傷亦甚くなつた。

。延元二年七月六日

上記賊黨等進んで山辺郡丹波市町の東方桃尾山龍福寺に攻め入り、遂に之を陥れた。

。延元二年七月十八日

直義は島津貞久に令して、吉野を攻撃すべきことを命じたから、貞久はその黨、伴作宗八、北志島少輔等の軍を召したるも、吉野前衛なる西阿等の剛強なり官軍に支へられ、その目的を達することができなかつた。

。延元二年八月三日

直義は吉野攻撃の策を決し、備前の水谷重親並に豊後の那波左衛門佐に令して、南都の警衛を橋和義の手に属して、吉野攻撃に伺ふべきを命じ、又別に、佐々木經氏、野上弥太郎、大島通秀、武藏右近將監等の兵を招集し吉野官軍攻略に當らしめたが、強勢なり西阿等の官軍に及ぶべき機なく、何れも荏苒として日を送つてゐた。

。延元三年二月二十日

直義は安藝の吉川經久に令して、高師貞の手に属せしめ西阿を攻撃せ

しむ。又別に其津定久に令し、その一族並に大隅薩摩兩國の軍勢を催して西阿を戰つたしめむ。この戰況は不明なるも、西阿の虜に迎撃せられて敗走したもののやうである。

。延元三年二月二十一日

顕家卿義良親王を率い南州の軍を率めて西北し行く。海道に試兵を平湯し、遂に伊勢に戦ひ伊賀を經て、是日南都を占領した。顕家進んで京賊を一撃に衝かんとせしも廿八日新銳の賊將高師直、同師泰、上杉重能、今川範國等殺倒し、希良坂附近に於て両軍の大激戦が行はれたが官軍遂に利ありず、義良親王は吉野に逃れ、顯家も兵を收めて、河内河内河内河内に参じた。この間西阿等大和の有力なる官軍は、因より顯家に呼應してこの戰闘に参加したと推するも、史料欠如して、その眞状は知るにすべからぬ。

附記

顯家卿が特に西阿の應援をたのみて大和に來たと案する件もある。即ち顯家東國より西上しつゝ、美濃までには海道を破竹の勢で鎌倉へ入つてきた。來たのであるが、美濃吉野原の合戦利ありず、千を京師に直入する能はずしてやむなく伊勢に轉戦す。伊勢の雲出川畔に再び賊と見え、戦ひしも、天運未だしく再び破れ大に困惑した。この時大和北方西阿の頑寇、眞不定親等の優勢なりをたのみざるを得ずしてこゝに、大和守院を得て大和吉野に入つてきたのである。

。延元四年八月十六日

南風競はず。後醍醐天皇吉野に崩じ給ひ、御年十二歳なり。後村・天皇、御位に即き給ふに、朝臣等志氣極度に沮敗し、退散隱遁を企てる。

者さへあるに及んだ。吉水印宗信は、頻りに謀めて將士を激勵し、諸國の武士の中に頼るべき者多數あると列挙して、吉野朝の礎石の危臺を救つた。かゝる暗夜に燈明北風を拉し去らん思の中にも、西阿が義心彌々堅く、志氣益々振ひ、代表的官軍であつたことは大平記中吉水印宗信の言によつても立證せられるのである。

大平記

就中、世の危きを見て、彌々命を輕んぜん。官軍を數ふるに先上野國に新田左中將義貞の次男、左兵衛佐義興武藏の國には、其家嫡佐次將義宗、越前國に脇屋刑部卿義助、同子息左衛門佐義治、此外云々中興大和に、三輪の西阿、道木の寶珠丸、紀伊國に湯淺山本、并遠三郎、加藤太郎、遠江には井伊介（中興）此外泛々の輩は數ふるに遑あらず、皆義心金石の如くにして、一塵も變ぜぬ者共也。

興國元年三月十二日

仁木賴章、直義の命を奉じ吉野の通路を警固し且開往に來りて攻めた。麻生宗教の兵も召し會されてゐるのであるが詳でない。或は西阿の剛強に恐れ余良附近に駐せし日を空しうしたのでありう。

興國元年十月二十三日

西阿進んで興福寺領を押妨し、就中維摩大會料所、大佛供座以下土貢を押留せしを以て、衆徒は春日の神木を木津に移して之を討つた。

興國元年十一月八日

春日神木の入京せんとするをきくや京師には大いに驚き、關白一條經通は、長者宣を下して、之を諭止したけれども（お英能抄）其の効なく、十二月十九日神木邊に於てより入京し、次で長講堂に入り強訴するに到

つた。一石今旦取要抄 春日神社大書
之れ全く興福寺が剛強にして、出沒極りなき、西阿を絶滅せられんことを京師に訴へたものに外ならない。

興國元年十二月

細川顯氏西阿征討の命を受けしと雖、西阿強盛にして進みかぬ進軍を躊躇せり。顯氏は陸奥守兵部大夫たり。先に尊氏と京師を隔れ、九州に退いては尊氏と共に多々良濱戰役に参加し、後上京しては弟足禪と共に義貞と戦ひ、又後正平二年には正行公を河内にて攻め、尊氏と義貞と不和なりしときその間を和解せしめたる程の足利氏の名將なり。これによつてみるに西阿の勢力の強盛なるを知るべし。

興國二年正月二十日

近江の佐々木鏡貞、真義の命を奉じ出羽經氏等と共に率ゐて來り

興國二年二月二十九日

細川顯氏等義貞の主力は西阿を奪たんとして、奈良と進發し中街道を南下して安倍山に陣した。奈良の駐在軍に二月。此の間顯氏は諸般の準備を整へ、且つ間諜を放つて官軍の陣容と偵察せしめ作戦計劃を練つたやうである。

安倍山に、西阿の居城開住、河合城の南に位しその麓に文珠院がある。當時その近傍一帶寺院傳房が建立せられてゐて、兵とあするものに至る便であつた。

山上に展望よく開け、正攻法をとるに適し、南は多武峯若野に通ずる路をたつ東街道を占めてあつたから、これを占領し一氣に西阿を奪たんと

西阿は之を迫へて激戦と交へたが、要害敵せず遂にこの要地を敵に占領せしむるのやむなきに至つた。

西阿の作戦上、多大の損失を來したことは言をまつまでもない。

興國二年三月十四日、十五日

細川顯氏は幕下田代顯綱、天野遠政、田代基綱、渡邊實和泉守護代都筑次郎左衛門、河内源氏石河五郎、秋山孫七、下村次郎左衛門尉、保野左衛門五郎等の兵を指揮して猛然として河合城の南面、並に東南と攻撃した。城兵よく之を拒ぎ晝夜激戦あり、兩軍の死傷甚だ多かつた。

興國二年四月五日

西阿剛強にして、河合城攻撃軍の敗報、京師に傳はりや上下色を失ひ、本日より十一日迄七日間五壇法を持明院殿で修せしむることとなり、大藏卿雅仲奉行となり、河關梨二品尊胤法親王、以下禪、榮海、極家清興等命を奉じて、その戦捷を祈つた。五壇法は如何なり悪魔を恐敵たりとも降伏退散せしむるものなり。故法で容易に行はれぬものなり。西阿の治勢が如何に京師を震撼せしかと窺ふことができり。

興國二年四月十一日、十二日、十六日

西阿の兵は進撃して、顯氏軍を襲ふ。敵軍多大の損害を受け、天野遠政、家子彦三郎等皆傷をうく。

興國二年閏四月八日

後攻めの官軍開住城の西方二軒の地点にあり石原田の要害により夾撃したので天野遠政等の賊兵出でて之と戦ひ。

附記 後攻めの官軍とはその何人たりや不明であり、何れ藤水が越智氏かが吉野朝の命をうけし東援したのであらう。

興國二年閏四月十九日

河合城の城兵必死の拒戦もその甲斐なく河合城は遂に陥り、賊軍之より主力を開住城に集中せしめられた。

当地大和の戦況、或は北軍の敗北を傳へ、或は南軍抵抗の頑強なりを傳へ、京都に於ては開住の勝敗を以て安否に關するをまで云ふに至り、西阿の勢力の如何に大なりしかを知らずし。

興國二年五月二日

賊兵成重城の東面に殺到し、堀及び堀を挟んで頻る激戦が行はれた。之が爲に田代基綱の幕下新藤次信弘等は傷をうけ、退却するの已むなきに至った。

興國二年五月十六日

常陸國小田城にありし、北畠親房は、白河領主結城親朝に書と興へて曰く、「和州開住は猶合戦最中で、京師もこの合戦が安否の合する所としてゐるから、開東に於ても急に活動を起し、之に乗せぬばならぬ」と、出兵を從心してゐる。

これによつてみるも西阿の強剛にして戦鬭激烈をきはめ、京師を震撼せしめたるは固より、諸國の官軍の志氣を鼓舞したることには事奇なり。

興國二年五月二十七日

田代基綱、柳筑次郎、成田五郎等の賊黨夜に乗じて、開住城内に入り、戦争益々激烈をきはめたが、城兵死守して、よく之を拒き遂に賊兵を遂に拂つてしまった。そこで賊兵は更に南面の攻口に殺到し居陣して

しまつた。

興國二年五月三十日

吉野朝に於ては紀伊の官軍小山淨國に諭旨を下し、關住城戰の酬を
も告げて、六月二十日未だに戰場にはセテ参すべきことと命ぜられた。
之れ關住城の勝敗は戦局に頗る大なる關係があつたことが明白であ

る。

興國二年六月二十六日

賊兵、田代顯綱、田代基綱、都筑次郎、石河本司、成田四郎等は關住
城の南堀並に堀裏に夜襲して頗る激戦があつた。田代顯綱が疵さ、負
ふに到つたのである。

興國二年六月二十九日

天野遠政、田代基綱、都筑次郎、豊前澤正、鹿草小四郎等、竹城(關住
城)の南面より夜襲し、高矢倉の南脇の堀内に侵入し、遂に高矢倉を
焼失せしむるに至つた。

賊兵堀籠と示重、横川經長、田代三位房以下死傷甚だ多かつた。

興國二年七月二日

夜に乘じて賊軍遂に關住城に逼り、總攻撃を開始した。城兵奮より必
死に之を拒ぎ壯烈なる激戦が行はれたが衆寡敵せず、城遂に陥落す。

大軍の包围を受けてから死守實に四ヶ月餘に及んだことは、西阿の如
何に精忠にして強勢であつたかと証することかできる。

西阿の嫡男空助はこの時、其の若黨と共に捕へられ、後遂に京都に送
られて、首を六條河原に懸けられた。而して西阿は遂に心無き、
いまだ平地城をすて、最後の詰城たる外鈴城に走つた。併し此の時

西阿の統制に服す、兵數は極めて少かつた。

興國二年七月三日

興國を造り、渡辺源四郎等の兵勢に乘じて長驅して激戦す。

西阿の残兵、鷺、赤尾、外録の城により或は出で、戦ひ、此の時、

敵將渡辺源四郎と鷺邑に戦ひ遂に敗れ、外録城に歸りて南、若野に在

す天子を仰いで戦死す。

興國二年八月十九日

京都に於ては、西阿の城陥落せしにより、昨年十一月八日宇治に進

發、同十九日入洛した春日の神木は、その後九月に全長に歸座す。

ことになつた。

大西阿公の戦死により、京都及び賦役は大いに安堵したことは春日神

木に歸座せしことによりても知らる。

西阿公と生報國の精神を子孫に傳ふ。

西阿の子良田は、西阿城の陥落と共に河内を走り、東條の柳木軍に投

じ、各地に轉戦して、軍功があつた。

正平二年十二月高師直、來り攻むるに及び、楠木正行等百四十三人と

共に、若野の皇居に参内して、後村上天皇に拜謁し、後醍醐天皇の御

陵に詣で、髻と切つて、如意輪堂に收め、翌正平三年正月五日四條原

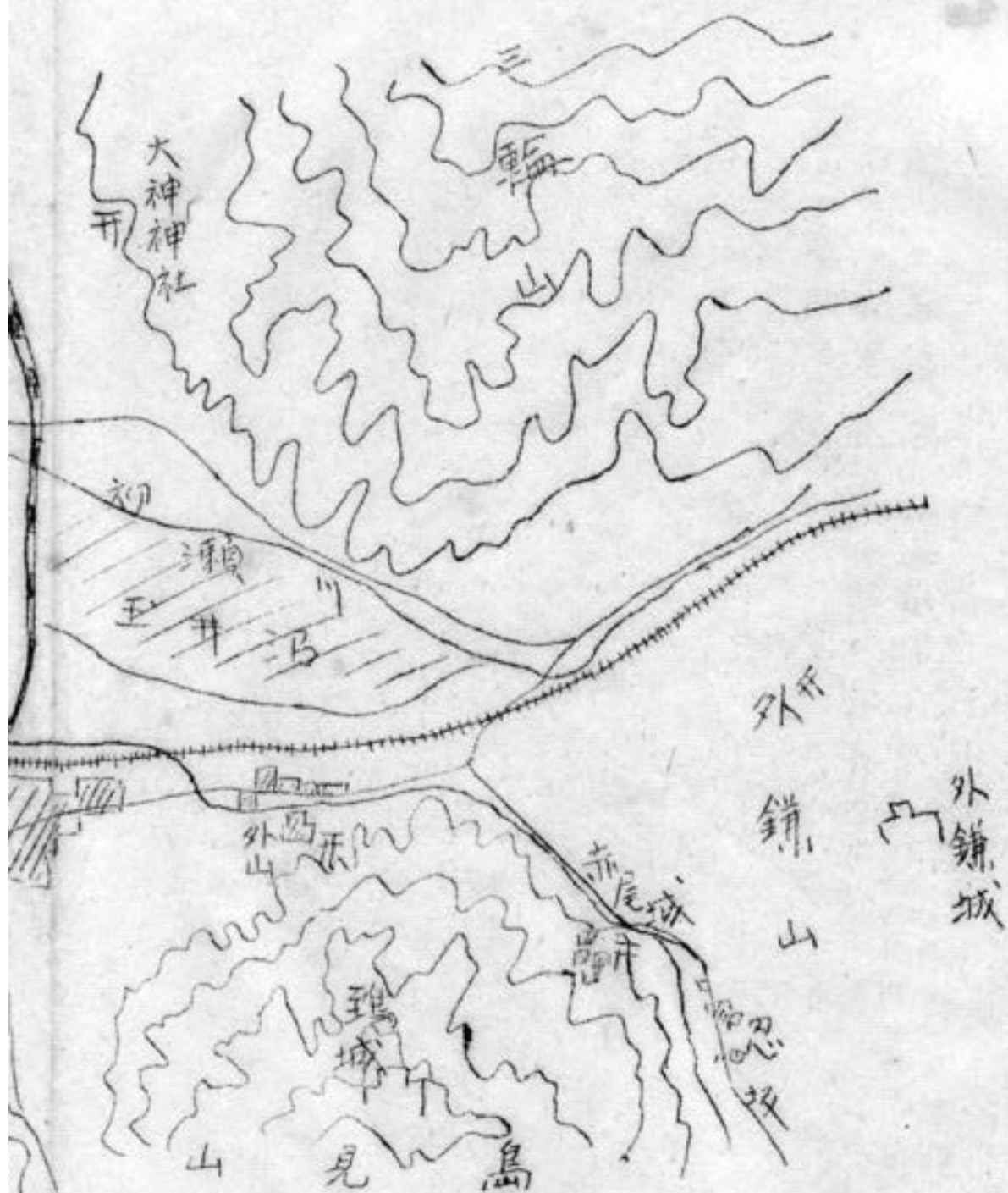
の合戦に於て朝来三十余度の壯絶なる戦鬪を交へ最後の三十二人と

なりて終始正行と行動を共にし、遂に力つきて自刃した。

火平記

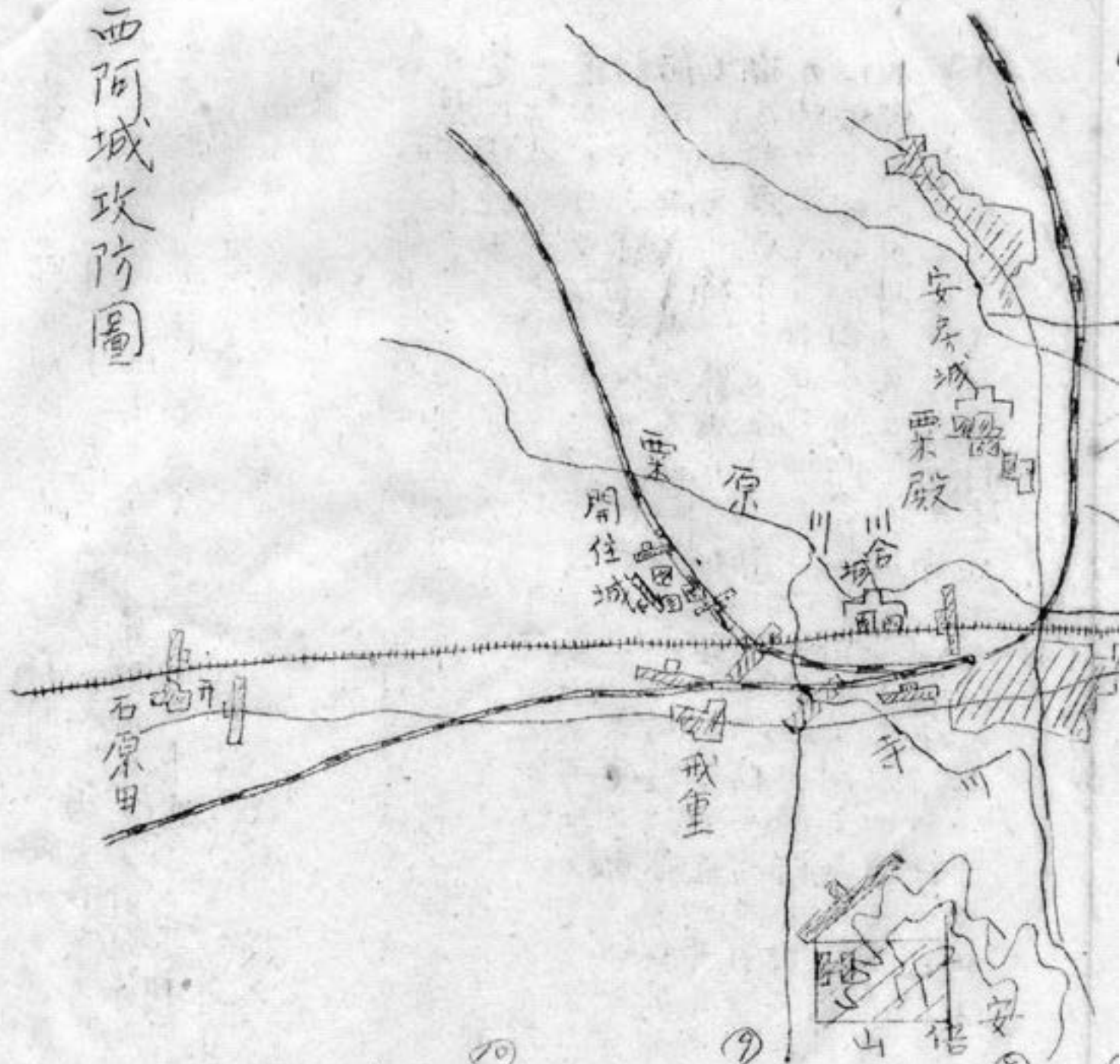
此の時、兎角の勳答に及ばず、只之が最後の参内なりと思ひ是

令弟新兵衛、全記、三行、四



- ① 興國二年二月十八日賊軍細川顯氏ハ南都ヲ発シ中街道ヲ進ミ穴太如安倍山ニ陣ス
- ② 興國三年西阿公ハ攻勢カニ出テ安倍山ヲ攻ム
- ③ 賊軍ハ三月初旬攻勢ヲ準備ナシ十四十五十六日河合城ノ東南面ヲ攻勢ヲ見テ功ヲ奏セズ後退セリ
- ④ 興國三年四月八日官軍増援隊石原田ニ來ル賊軍背面ヲ留感セリニツキスグ攻勢ヲス
- ⑤ 四月八日賊軍河合城ヲ攻勢ヲス
- ⑥ 西阿公ハ四月十一日十二日攻勢カニ出ツ
- ⑦ 四月十九日河合城ハ遂ニ賊ノ占領スルトコロトナル

西阿城攻防圖



賊ノ占領スルトコロトナル

⑧ 五月二日賊軍ハ戒重土城
攻戰手陣地ヲ構築ス
五月二十七日攻戰手開始
敗レテ南面ニ居陣ス

⑨ 六月二十六日賊軍攻戰手
來ル

全ク九月竹城(戒重城)

角占領セラル

今夜總攻戰手ス

⑩ 七月二日賊軍總攻戰手
來ル

西阿公、鷄、赤尾、鎌

山城ニ逃ル

七月三日外鎗

戰死ス

子息二人、野田四郎子息二人、柳將監、西河子息、関地良月以下今度の
軍に一足も引かず一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、
先皇の御廟に参りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、
如意輪堂の壁板に各名字を過去帳に書連て、其奥に、返らじと兼ねて
思へば梓弓なき數にいろ名をもとむる、と一首の歌と書留め、逆修
の爲と覺しきて、各髻の髪を切つて、佛殿に投入、其の日吉野を打出
て敵陣へを向はける。

去る程に師直と柳とが間、一町許りに成りにけり、是ぞ頼ふ處の敵よ
と見澄して、魯陽二度白骨を連ねて、韓と龍も構へて戦ひける心も、
是には過ぎじと勇み悦んで、千里を一足に飛んで懸らんといひ許りは早
りけれども、今朝の已刻より申時の終まで、三十餘度の戦に息絶え氣
疲るゝのみならず、深手浅手負はね者無りければ、馬武者を追つめて、
討つべき様ぞ無りける。されども多くの敵共、四方八方へ追散して、
師直七八十騎にて控へたれば、何程の事があるべきと思ふ心を力に
て、初田、柳、野田、関地良月、河辺石掬九我先々とぞ進みたる。
柳次郎眉間ふえのはづれ射られて、抜く程の氣もなし、正行は左右
の膝口三所、右の頬さき、左の目尻、篋深に射られて、其矢を野の霜
に伏したるが如く折懸けたれば、矢すくみに立つてはたりがす其外三
十餘人の兵共、矢三筋四筋射立てられぬ者も無りければ、今は是まで
ぞと敵の手に懸るなとて柳兄弟刺違へ北枕に伏しければ、自余の兵三
十二人思ひくゝに腹掻き切つて上が上に重り伏す（下男名）

6 西阿公の城塞

。西阿公の城郭は、成重、河合、安房、鷄、外鎌、赤尾の六城である。その位置、大和盆地の南端、三般山脈の山腹に位し、出で、は吉野千早の守につき、入つては吉野前面の敵路を扼し、賊軍一步もこよひ吉野に進入すること能はざらしめ、大和盆地よりする官軍の補給、確保の重任を双肩に擔つておたもつてある。而して成重、河合、安房の三城は平野に築かれた平城であり、河川等の自然の要害に加ふるに堀、塙、藪等を城の四圍に廻し、高矢倉等を造つて、最も堅固に築城し、外鎌、赤尾、鷄の三城は山地に經營し、眺望よく開け敵狀瞰下に便にして、峻峻難攻の山奥に築かる。この規模構造、要害防備等、實に堂々たるものであり、何故に、西阿公はこゝの大城建設の地と定めただか。當時西阿公は玉井沼畔に在任してゐたが、勤王の心に非難を蒙り、一族即ち當年來思親の土氏と提けて起つたのであるが、これには、あらゆる要害の地を選んで營むてあり、この人情の然りしむるところである。即ち第一に指定したのが鳥見山である。これは西阿公の祖高市王の御母胸肩氏の氏神即筑前國の宗像神を祀する地域の後方に聳ゆる峻嶺であり、その山を憑據するに赤尾、外鎌山を選定したものである。當時の築城法よりすれば皆山城を以て普通とせる頃であるが、尤當然なることである。然し西阿公は當時流行の普通山城を以て安心できざらう。見の軍略家であつた。敢然地物を利用して、成重、川合、安房の城を建設し、あらゆる努力を集中したのである。

註 吉野時代の築城法

多くは山の嶮岨を利月せり小規模のもののみで人工を以てその防禦力を増進したものやうである。城の外側には柵又は壕を二重或は三重とし、各一門を有してゐた。土地の状況により土埴竹藪を幾重にもめぐらし所々に櫓臺を設けた。又副防禦柵は堀、柵、竹藪、釘板、其外、逆茂木を用ひたものやうである。攻堅手屋には埋草、持植竹束、築山（現在の所謂歩兵陣地）エー楷（城壁に登る梯の類）

吉野時代の兵器

主要なるものは弓矢及刀である。新に槍が現れたやうだが廣く隊伍の間にはわたつてゐなかつたやうだ。鉈創劔刀劔の数が多く、槍劔の数が少い（文献上）

戒重城

戒重城は、開任城又は開地城、開地井城とも書き城の周囲が唐き竹藪をもつて囲まれてゐたやうな竹城とも云はれてゐた。城域約西一八五米、南北二五米、大道路之を南北に貫き、南御門と北大門により外部と交通し、その大路面方は土地一般に高燥で城主がゐたのでありう。

延元興國の後およそ二百八十年後、竹軍交忠の頃、即ち元和四年八月織田信長の弟長益の四男當時摂津の島下郡時吉に本據を構へてゐた織田長政がこの舊戒重城内に引移り、その後七世の孫、輔宣が延享二年十二月、磯城郡織田村に轉封するに到る百二十七年間の織田氏の迹に當る地である。織田氏は西阿公の舊城に少々の改造を加へたであらうが、規模は

舊狀を保持したものでありう。これらを通して西所へバ心血をこ
いいた、戒急城と想像してみると、無限の悲壯なる感じが湧いて
くる。

竹藪を植栽して防備に供したことは元弘以前よりよく行はれた由
であるが本城などもその好例である。

河合城

河合城は北に粟原川、南に寺川灌流し、城の東方にて相近づき西方
にて合流してある間に築かれたものである。

今現地着しく、変改工事せられ往時の古跡を知るのに由もないが、

大体の位置、櫻井駅構内西方、関急変電所の西側は南北にわたつて

土地少しく低地をなして帯状に認められ、この帯状線に直角に北方

及南方に於て東西にわたる帯状低地線がある地をたたらうと想像

されり。

城跡と測ると南北二五〇米、東西約二二〇米の城砦が測定され、四周

の濠に添うて高い土堀が築かれおたことは関任城と同様は往時の文

献によつて知られる。

安房城

栗原に設けられし城で、如何なる位置に如何なる想像をせられしから

るよしがない。たゞ土地名「可園」による左の地名「龍」でつて想像

するとほぼ二百里の方形がでる。

十二所（陣所）屋鋪、大門、藪向、垣内などがそれである。

この方形につ、まれし中は土地がや、高い。又昔この寺方城の

すぐには、玉井沼と称した大沼地があつて、正長の渡、三輪の